

531
24

6 7 8 9 6^{cm} 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7^{cm}

始



亨聖辰之
黒木嘉吉 校訂

元禄歌并伎傑作集 上巻

江戸之部

子 稲田大学出版部蔵

序

出雲の阿國以來三百餘年の長い傳統を有する我が歌舞伎劇が一先づ大成したのは實に元祿時代であつた。而して完全な脚本の無かつた當代の劇を知らうとするには、どうしても繪入狂言本によるより外に方法はない。繪入狂言本は各座が其興行毎に賣出した紙數十數丁の冊子であるが、其狂言の丁寧な番附役割附であり、極めて精細な筋書であり——いや時としては完全な脚本と言ひ得る程度のものであり、又出演俳優の舞臺姿を精細巧妙に描寫した畫報でありもする。即ち當代の繪入狂言本なるものは、寶曆期以後の番附と繪草紙と臺本とを兼ねたものであつた。さうして其挿畫に至つては當代名匠の筆に成つた力作が多く、自然後世の繪草紙や繪番附や又は今日の寫眞などに比して、より多く藝術的に、より多く舞臺面を浮かばせ、より多く活躍の模様を巧妙に描き出して居る。故に本文と相俟つて、其の内容を明かにし、殊に舞臺情調を

示す點に於ては、後世の脚本だけを讀む場合以上の効果を與へるものである。故に當代の歌舞伎劇を研究せんとする者に取つては繪入狂言本なるものは、實に唯一無二の根本資料であると言はなければならぬ。

然るに其傳本は極めて稀であつて、既に文化文政の頃に於ても稀觀書として好事家の祕藏する處となり、三馬・蜀山人・種彦・豊芥子等其頃著名な蒐集家の祕庫に其數十冊が收められて斯道の寶物扱にされたものであつた。況んや明治維新の大改革を経てから半世紀の年月を閲した今日に於ては尙更の事で、時あつて其中の一二冊が市場へ出る事があれば、驚くべき高値を呼び、兎角金には縁の遠い忠實な研究者の手には、どんな事にも入らないのである。眞摯なる國劇史研究の漸く起らうとする今日、かゝる重要な根本資料の容易に手にし難いのは洵に學界の恨事ではあるまいか。加之昨大正十二年九月の劫火によつて、金城鐵壁と我も人も許した祕庫の中にあつた再び得難き貴重圖書さへも、忽ちにして灰燼に歸し、千悔萬恨なほ且つ及び難きを痛感した吾々

は、尙更かういふ貴重資料の忠實な複製といふ事の必要なるを切實に思ひ、其實行に關して出來得るだけの努力を竭すことは、斯道の爲に力を致す第一歩たるを深く信じ、奮つて此難事業の遂行に當る決心をした。

我等は早稻田大學出版部が我等の此意圖に共鳴し、貴書弘布の精神を諒とし、學術研究上の便益の爲に、利害得失を超越して此出版を敢行された態度に敬意を表し、専ら其衝に當られた種村宗八・伊藤輔利兩氏の好意に對しては深く感謝の意を表するのである。

大正十三年十二月

校訂者しるす

例言

一 選定の範圍

本卷には江戸の中村・山村・市村・森田の四座で興行した歌舞伎劇中から、其代表作と思はれるものを選んで其二十四種を収めた。

排列は年代順により、上は貞享三年から下は寶永五年に至る迄の二十一年間に亙つて居る。併し巻頭の「椀久浮世十界」を除けば、他はすべて元祿十年以後十年間の作に止まる。

僅かに十年間の作を以て江戸の元祿時代を代表させるのは少し範圍が狭過ぎはしないかと思はれないでもないが、江戸歌舞伎に關する年代記を閲しても、この十年間が眞に元祿時代の代表作の演ぜられた時期で、殊に元祿十年以前には、詳しい筋書に挿繪を加へた所謂繪入狂言本なるものは無かつたのであるから如何ともしがたいのである。よつて此傑作集の立場からいへば、江戸歌舞伎繪入狂言本の陳吳たる「大福帳參會名護屋」を巻頭に据ゑるのが至當である。けれどもこれ以前に如何なる先行者のあつたかを示す爲に、その代表的なもの「椀久浮世十界」を先に掲げて比較研究の便に供する事とした。

江戸の元祿劇壇を代表した名優は初代市川團十郎と中村七三郎とであつた事は言ふ迄もない。而してその團十郎は寶永元年に舞臺上に横死をとげ、それから五年後れて七三郎は舞臺で昏倒して不歸の客となつた。そして七三郎の追善として演ぜられたのが、本巻の最後に收めた「追善彼岸櫻」である。かくして二名優の死と共に江戸劇の上の元祿時代は終りを告げたと見てよささうに思ふ。

二 選定の標準

江戸の歌舞伎劇が放れ狂言の域を脱して續き狂言となり、始めて「四天王稚立」の大外題を掲げて興行するやうになつたのは延寶元年である。此年から、本傑作集の最後に收めた「追善彼岸櫻」の興行された寶永五年迄は三十六年、此間に、江戸の四座に於て興行した芝居の数は少くとも百四十番を下らず、元祿十年の「大福帳參會名護屋」以降の興行外題だけでも無慮百十餘の多數に及ぶのである。其全部とは若し言へないにしても、大部分は繪入狂言本として刊行されたものと思ふ。然るに校訂者は多年百方搜索探求したにも拘らず、其刊本を見るを得たのは漸く其半數にも満たないのである。併し今日に於ては我等の力では、これ以上の探索は殆ど不可能である。故に此中から更に代表作を選定するより外はないと信じ、二十四篇を選んで本巻に收める事としたのである。而して其選擇に方つては、古來名物として傳稱されたもの、例へば歌舞伎十八番の原作たる「大福帳參會名

護屋」「兵根元會我」「源平雷傳記」「成田山分身不動」の如き、又は八百屋お七を材題として居る「中將姫京雜」の如きは之を全部採入れる事、成る可く多くの作者から其作を採る事、成るべく興行座の偏らぬ事、題材の多方面に亙る事、同題材のものは成るべく比較研究の必要あるものに限る事、前を承けて後を開くやうな史的價値に富んだ作を漏さぬ事、以上の諸點に注意した。

三 其作者と内容

以上の標準に基づいて選定した二十四篇中、作者の明かなるは十四篇で、その中團十郎の作は九篇を占め、その他中村清三郎・宮崎傳吉・藤本平左衛門・津打九平次・津打治兵衛・樋口半右衛門・中村清五郎等の作が一・二篇づつある。作者不明の十篇中、八篇迄は山村座の興行でその中の七篇は中村七三郎が中心となつて演じてゐる事は頗る注目すべきである。當代の名作「傾城淺間嶽」が七三郎の自作であるとの説もあれば、是等も或は彼の作であつたかも知れないと思ふ。

興行座分けにして見れば、山村座九、中村座八、森田座五、市村座二といふ割合である。當時中村・森田兩座には主として團十郎が活動し、山村座には七三郎が據つて居た。殊に中村・山村兩座が最も繁昌したやうであるが、これやがて此兩名優の偉大さを語るものであるといはなければならぬ。次に内容上から見れば、例の歌舞伎十八番中、元祿時代に初代團十郎によつて初めて演出された

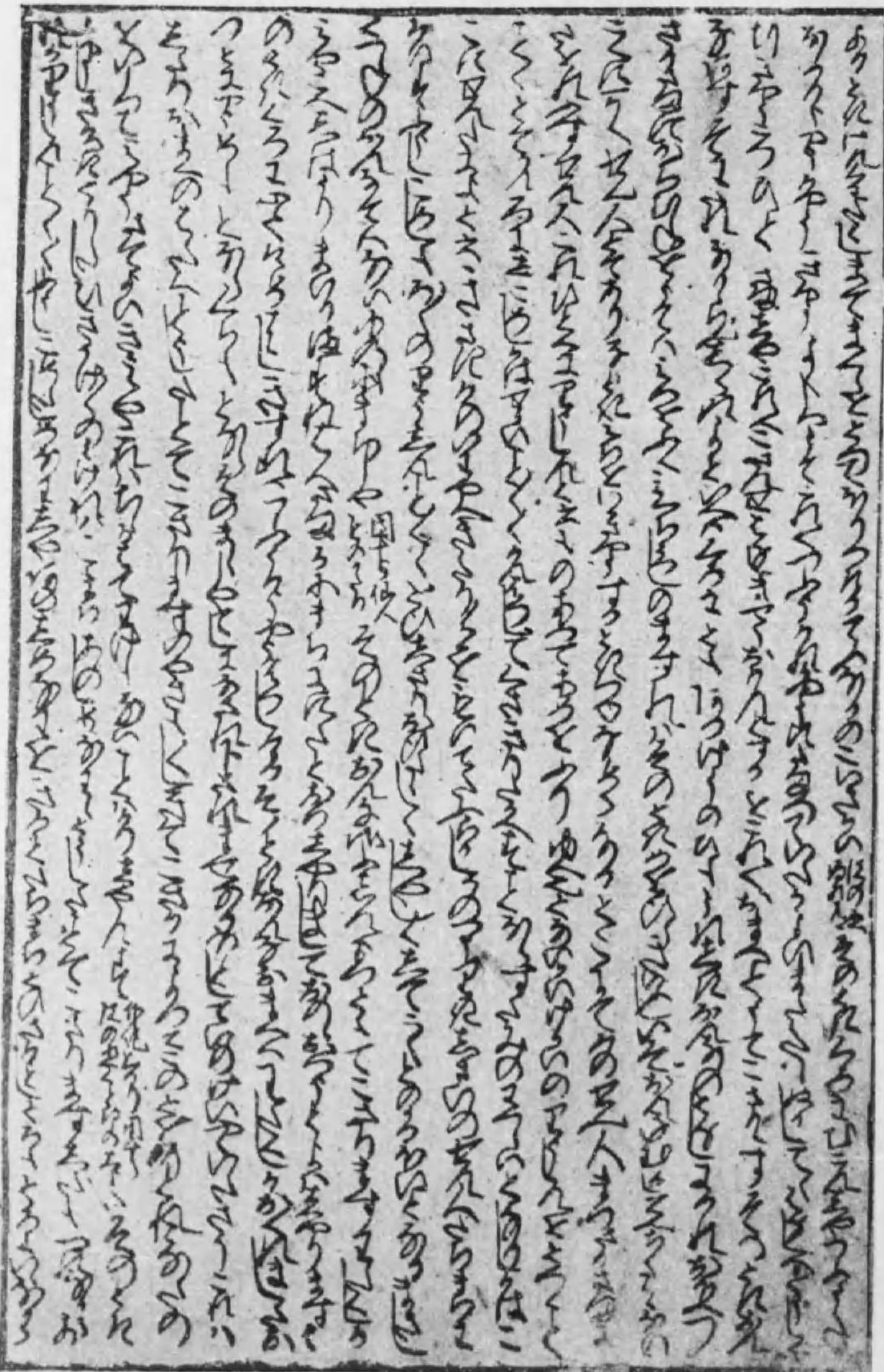
「鞘當」「不動」「鳴神」「暫」「象引」の全部を収め得た。加之その中には豊芥子以下によつて討究された歌舞伎十八番考の所引以外に、新研究資料を提供し得たことを我等の欣幸とする。

その他曾我物・薄雪物・道成寺物・隅田川物・四天王山入・浅間物・小栗物・頼政物等歌舞伎劇の大系統をなすものの代表作を始め、椀久・關東小六・八百屋お七等を題材とした名作をも収めることゝした。又その趣向の上から見ても、身代り・愁歎・身賣り・草履打・殺し等の如き犠牲的・悲劇的のもの、又は鍾馗・草摺曳・女鳴神・竹拔五郎・五輪碎き・率塔婆曳の如き荒事風のもの、髮梳・帶曳・道行・狂亂等の如き抒情的の振事物、又は執念物・怨靈物・靈驗物等の典型たるもの等、數へ来れば際限なく、歌舞伎劇としての趣向は大抵網羅されて居るやうに思ふ。

尙又當代の劇場音楽としてはどんな種類のもが用ひられたか、又それがどんな場合に用ひられたかも、本書によつて初めて明かにされるわけで、音曲史の研究上にも重要な資料を捧げたと信ずるのである。

四 校訂の方針

原本は次頁寫真版のやうな細字の假名書きで、その上句讀點もないのであるから、これをそのまま活字に改めたところで到底實用には供し難く、加之假名遣の如きもめちやくで、たまに使つて



(りよ動不身分山田成)

ある漢字にも誤用、音借などが少くないので、假名遣を正し、適当な漢字を當て、句讀點を施し、對話と地の文とを明かにし、段落を切つて讀解の便を圖る事とした。それが爲には校訂の際大いに泣かされぬいた。出来るだけの努力はした積りであるが、まだどうしても判讀し兼ねる箇所があり、明かに版下書きの誤寫と思はれる箇所もあつたが、どちらにも勝手な當推量を加へず(本ノママ)として博雅の士に御示教を俟つことにしておいた。

挿畫は全部寫真版として加へた。その上に表紙や扉をも寫真版にして忠實に原本の面影を遺すを方針とした。只一言お断りして置き度いのは、寫真版の大きさは、書物の體裁上、原寸より少し縮寫されて居る事と、巻頭の「椀久浮世十界」の原畫が餘り汚損して居たので、少し修正を加へさせようとしたら、當方の注文以上に加工した點もあつて、稍原畫の味を損じた嫌のある事とである。この二點は何卒諒とせられ度い。

元祿歌舞伎傑作集 上卷

(繪入狂言本 二十四種 江戸の部)

目次

一	椀久浮世十界	貞享三年正月	中村座	作者 不明	一
二	參會名護屋	元祿十年二月	中村座	作者 中村明石清三郎・市川團十郎	一九
三	兵根元曾我	元祿十年五月	中村座	作者 中村明石清三郎・市川團十郎	五五
四	關東小祿	元祿十一年三月	中村座	作者 不明	九三

五 源平雷傳記……………二二

元祿十一年八月 中村座 作者 市川團十郎

六 一心女雷師……………一五一

元祿十二年六月 山村座 作者 不明

七 景政雷問答……………一九三

元祿十三年正月 森田座 作者 三升屋兵庫

八 和國五翠殿……………二三五

元祿十三年三月 森田座 作者 三升屋兵庫

九 薄雪今中將姫……………二九九

元祿十三年三月 山村座 作者 不明

一〇 傾城王昭君……………三〇九

元祿十四年正月 中村座 作者 市川團十郎

一一 傾城三鱗形……………三三九

元祿十四年正月 山村座 作者 不明

一二 出世隅田川……………三七九

元祿十四年三月 中村座 作者 市川團十郎

一三 三世道成寺……………四二一

元祿十四年七月 森田座 作者 宮崎傳吉

一四 賴政萬年曆……………四四五

元祿十四年力 山村座 作者 不明

一五 鬼城女山入……………四七九

元祿十五年七月 山村座 作者 不明

一六 信田會稽山……………五〇七

元祿十五年閏八月 山村座 作者 不明

一七 傾城淺間曾我……………五三七

元祿十六年正月 山村座 作者 不明

一八 成田山分身不動……………五九
元祿十六年四月 森田座 作者 市川團十郎

一九 小栗鹿目石……………六一
元祿十六年七月 市村座 作者 藤本平左衛門

二〇 小栗十二段……………六七
元祿十六年七月 森田座 作者 三升屋兵庫

二一 傾城角田川……………六九
寶永元年二月 山村座 作者 不明

二二 早咲隅田川……………六九
寶永二年四月 市村座 作者 津打九平次

二三 頼政五葉松……………七三
寶永四年正月 山村座 作者 津打次兵衛・樋口半右衛門

二四 追善彼岸櫻(中將姫京雛)……………七一
寶永五年三月 中村座 作者 中村清五郎



梶久保世十郎

解説

貞享三年正月、中村座興行の「腕久浮世十界」の番附・役割及び立役の出端名告り臺詞、女郎褒め詞並に大切大踊の歌と臺詞とを載せた正本である。紙數八葉の小形本で、通しの繪三面を挟んである。畫工は不明であるが、畫風からいへば、師宣とでも言ひ度い。

芝居の筋の無いのは残念であるが、此頃はまだ筋を書いた狂言本は無かつたのであるから止むを得ない(序文参照)それでも番附や挿繪を併せて見ると、その時の舞臺の模様は大抵想像がつく。殊に大踊の歌と挿畫とは大いに珍とすべきである。

腕久の事蹟は、西澤一風の傳奇作書や馬琴の蓑笠雨談等に見えてゐる。それによれば、大阪御堂前の豪商で腕屋久右衛門と稱へ、大阪新町の遊女松山に溺れて産を傾け、一時は發狂した事もあり、延寶五年九月七日に歿したやうである。(關根只誠の戲場年表に貞享元年歿とあるは「腕久一世物語」によつたものか)而して此の卷説は先づ俗謠に歌はれ、次いで劇に仕組まれたものらしいが、劇としては、今日傳はる所では此作が最も古いやうである。腕久狂亂が見せ場であつた事は挿畫で推測され、又「あのや腕久」の小唄の歌はれた事は番附の小書で想像される。上方では大和屋甚兵衛が元祿三年正月京都の都萬太夫座で「傾城袖の海」で腕久を演じたのが古く(甚兵衛はこれより先大阪で既に演じたらしいが、明らかでない)其時の腕久出端の歌が寶永元年の「松の落葉」卷三に出てる。

出演俳優中、中村七三郎はこの時廿五歳の若盛りで、中村傳九郎もほぼ同年輩である。又舞曲扇林(貞享三年刊)によれば、玉井權八は作者としても知られ、杉傳十郎は「今様藝古來事知」といはれた劇界の故實家であり、鈴蟲權左衛門は若山五郎兵衛と並稱された當時の芝居唄の名人であつた。板元のもづや十右衛門は、種彦の「用捨箱」に店頭圖が載つてゐる「六方言葉」の出版元正本屋十右衛門のことであらう。

	<p>腕久浮世十界 番</p> <p>中村南村町 十右衛門</p>		
<p>中</p>		<p>かん</p>	
<p>三才</p>	<p>二才</p>	<p>一才</p>	
<p>附リてはさうやつああけやのあちやのさう やうふんのあふ 附リてはさうやつああけやのあちやのさう やうふんのあふ 附リてはさうやつああけやのあちやのさう やうふんのあふ</p>	<p>附リてはさうやつああけやのあちやのさう やうふんのあふ 附リてはさうやつああけやのあちやのさう やうふんのあふ 附リてはさうやつああけやのあちやのさう やうふんのあふ</p>	<p>附リてはさうやつああけやのあちやのさう やうふんのあふ 附リてはさうやつああけやのあちやのさう やうふんのあふ 附リてはさうやつああけやのあちやのさう やうふんのあふ</p>	<p>附リてはさうやつああけやのあちやのさう やうふんのあふ 附リてはさうやつああけやのあちやのさう やうふんのあふ 附リてはさうやつああけやのあちやのさう やうふんのあふ</p>
<p>好色大人後指</p>	<p>大女身</p>	<p>言分鬼歳男</p>	<p>好色大人後指</p>

大友民部出端名のり

一 代金八	花井	中村	七三郎
二 女	花井	中村	七三郎
三 下女	花井	中村	七三郎
四 小女	花井	中村	七三郎
五 見下	花井	中村	七三郎
六 見上	花井	中村	七三郎
七 見中	花井	中村	七三郎
八 見下	花井	中村	七三郎
九 見上	花井	中村	七三郎
十 見中	花井	中村	七三郎
十一 見下	花井	中村	七三郎
十二 見上	花井	中村	七三郎
十三 見中	花井	中村	七三郎
十四 見下	花井	中村	七三郎
十五 見上	花井	中村	七三郎
十六 見中	花井	中村	七三郎
十七 見下	花井	中村	七三郎
十八 見上	花井	中村	七三郎
十九 見中	花井	中村	七三郎
二十 見下	花井	中村	七三郎
二十一 見上	花井	中村	七三郎
二十二 見中	花井	中村	七三郎
二十三 見下	花井	中村	七三郎
二十四 見上	花井	中村	七三郎
二十五 見中	花井	中村	七三郎
二十六 見下	花井	中村	七三郎
二十七 見上	花井	中村	七三郎
二十八 見中	花井	中村	七三郎
二十九 見下	花井	中村	七三郎
三十 見上	花井	中村	七三郎
三十一 見中	花井	中村	七三郎
三十二 見下	花井	中村	七三郎
三十三 見上	花井	中村	七三郎
三十四 見中	花井	中村	七三郎
三十五 見下	花井	中村	七三郎
三十六 見上	花井	中村	七三郎
三十七 見中	花井	中村	七三郎
三十八 見下	花井	中村	七三郎
三十九 見上	花井	中村	七三郎
四十 見中	花井	中村	七三郎
四十一 見下	花井	中村	七三郎
四十二 見上	花井	中村	七三郎
四十三 見中	花井	中村	七三郎
四十四 見下	花井	中村	七三郎
四十五 見上	花井	中村	七三郎
四十六 見中	花井	中村	七三郎
四十七 見下	花井	中村	七三郎
四十八 見上	花井	中村	七三郎
四十九 見中	花井	中村	七三郎
五十 見下	花井	中村	七三郎
五十一 見上	花井	中村	七三郎
五十二 見中	花井	中村	七三郎
五十三 見下	花井	中村	七三郎
五十四 見上	花井	中村	七三郎
五十五 見中	花井	中村	七三郎
五十六 見下	花井	中村	七三郎
五十七 見上	花井	中村	七三郎
五十八 見中	花井	中村	七三郎
五十九 見下	花井	中村	七三郎
六十 見上	花井	中村	七三郎
六十一 見中	花井	中村	七三郎
六十二 見下	花井	中村	七三郎
六十三 見上	花井	中村	七三郎
六十四 見中	花井	中村	七三郎
六十五 見下	花井	中村	七三郎
六十六 見上	花井	中村	七三郎
六十七 見中	花井	中村	七三郎
六十八 見下	花井	中村	七三郎
六十九 見上	花井	中村	七三郎
七十 見中	花井	中村	七三郎
七十一 見下	花井	中村	七三郎
七十二 見上	花井	中村	七三郎
七十三 見中	花井	中村	七三郎
七十四 見下	花井	中村	七三郎
七十五 見上	花井	中村	七三郎
七十六 見中	花井	中村	七三郎
七十七 見下	花井	中村	七三郎
七十八 見上	花井	中村	七三郎
七十九 見中	花井	中村	七三郎
八十 見下	花井	中村	七三郎
八十一 見上	花井	中村	七三郎
八十二 見中	花井	中村	七三郎
八十三 見下	花井	中村	七三郎
八十四 見上	花井	中村	七三郎
八十五 見中	花井	中村	七三郎
八十六 見下	花井	中村	七三郎
八十七 見上	花井	中村	七三郎
八十八 見中	花井	中村	七三郎
八十九 見下	花井	中村	七三郎
九十 見上	花井	中村	七三郎
九十一 見中	花井	中村	七三郎
九十二 見下	花井	中村	七三郎
九十三 見上	花井	中村	七三郎
九十四 見中	花井	中村	七三郎
九十五 見下	花井	中村	七三郎
九十六 見上	花井	中村	七三郎
九十七 見中	花井	中村	七三郎
九十八 見下	花井	中村	七三郎
九十九 見上	花井	中村	七三郎
一百 見中	花井	中村	七三郎

大友民部出端名のり 中村七三郎

一それ前佛はかくれ。後佛は未だ世に出でず。二佛の中間侍どももたか。あと御前に。念なく早かつた。許す罷り立てとなん見渡せば。庭訓の往來春の始めの御悦び。貴方に向つて目出度くかしくと。祝ふ睦月の門々は。袴搦栗だいく所末繁昌。物もう。あどどれいへそんじようそれこんじよう此方へ御禮申す。やれお忝くあります。なんとと。ざゝめき勇む其隙に。はや七種のまつり事。唐土の鳥と大和の鳥とぐわんじ合せて七種齋。かき寄せてほと。またほとくと水雞のたくと。夏は来て螢飛びかふ夕涼。柴の戸ぼその夜の雨に。涙な。添へそ。山時鳥。鳴く音は高きたてがみの。朝日の床の亂心か。因果か骨までく腐つた。くされ縁か戀風か。痘癩許よりぞつと寒いはこりや又あたる所譯だと。振仰向いて眺むれば。つげくる雁は三つ四つ二つ。二人が仲はいつかさて。解けて流れて三島へ落ちて。三島女郎衆の化粧水も。こぼれぬ。其様と我と二葉の松の千代と諺つて。はや。新枕。數積り。二人が中にやゝが出來たら。お乳やめのとに抱せて。やあら好い子や。千代の子やなんと。人に譽められたらば生きても死んでも。立つても居ても。爪先から。蟬折ま



でづくめかいて悦ばんに。あんたる風ひき神の咎めにや。思ひし人には逢ひもせず。又ほ、笑んだお顔も見ず。あまり思ひに堪へかねて。萬歳の事存じた慰み。能をおつ始め、間もあれ。あひあれ。隙もがな。お袖に縫つて。目許をきつと見合せたらば。やれおはもじや。面を眞赤に紅葉狩。野にも山にも。川にも。里にも。濡の廢らぬ浮世とは。何やつが。言ひ出して。あつたら。若い者に。肝精を。やかせるこんだ。

熊原和田之助 せりのり出端

中村傳九郎

へあら目出たや。天の戸の。開くを遅しと。そつて驅け出すとられん坊。前生は。切利天の良耶摩天の野暮天。今は葦原國の新町。吉原國の濡の里にて月日を送る。先づ初春の約束とて。神樂太鼓の猿鳥追が座敷のさいけう(歳刑)に始めて君に逢ふ晩は。大をん(太陰)。音頭が申してまうさく。さいせつ(歳殺)よりもすました心は。謹請再拜。再拜々々と。剽輕へうび(豹尾)の。そりの大將軍。大は、物にたいさい(太歳)ものちやと。おてきにその方向ひて。口説を嫌ひ。文始めに。あら玉の年の始めの若水あげは。君にならでは汲ませまいとて。年徳棚にも上げずしてじぶん女にく

れた所は。間日を見附けて。よこいた文か。又は儀式に大福のお茶を祝はんそのためか。餘の方より嫁取らすと。さだむ心をあやぶむ。君のはかなさよ。思へばこそは二挺たち。船乗り始めの先陣。馬乗り始めの先驅。浮名立つ身も厭はぬ心底。羊の歩み隙の駒。馬がなければ牛に乗つても。此廓へ行きては歸りくは行き。通ふ心は十方暮。暮に門立ち。のぞくと開くと。格子の内。□□も始めに節分の豆板銀を。かい掴んで。天一天上歳下食。上中下に至るまで。そりの神は身が宿へ野暮神たちはそつちでく必ずござるな。三年塞り。地震に餘と。滅門かためて夢違ひの猿の札。除の守を貼つて。焼頭に移。いけん。なもしやる其人は金神鬼門とにうがく(本ノママ)かざつて。それのぞかば長々も候や。短い物も候ふと。鎗の立つた眞魚箸にて。眼の黒星彼岸になし。八專土用に惱亂頭痛の病を授け。寒念佛の往生づくめ。通り者に悟を開かせ女郎狂ひの種を蒔かせて。八十八夜の別れの霜。夜もさ。あさくござれや。いづくへく元は延寶。後には天和二人やはらぐ和ぐ里へ今は貞享。てき有るかたへ。振よし髪よし。形よしとて妓衆が七五三。五々三期添ひたや思はく様と。くみしめ繩手を一筋に。悦ぶところは繁昌の名に橘の花の姿か。姫小松敷の小妓がさゝめきて。何や彼やとて争ひに。うそで御座らぬほんだはら。繰言ながら偕老の。契をこめし身を持



ちて。やぶかうじな事ばかりと。事をわけなすわけの道。待つを便に賤が身も。揚屋の門につつ立つて。亭主々々と囀らば。浮氣な亭主の癖として。ござつた〜大盡の。先に立つて幫間の御出でと。いふより早く座敷に直つて。蓬萊飾三寶土器々々のない雜器にみ御供をそなへて。三々九度ほど酒盛すごして。はや床入の節に入つたら。浮世の人のつれ節に。正月は二日の晩。寢言か小言かよし事か比女始の雜談な。申さぬとても御存じ〜。床を取るとも明の方。巳午の間乗るによしと。小妓曆の星を守るこんだ。

一丁種へ旦那あれ女郎衆の道中が見えまする、お褒めなされませい。

傳九郎詞やい丁稚め、うぬめは小さい身體からようまけたしたな、ちくとんばあり褒め申すべい。そこで聽聞仕れ。

女郎かけ合 ことばめ

中村傳九郎

一全盛の往來、はでの始めの御悦び。妓衆に向つて先づ言ひ立て申す。おわん風流萬事名を申して格子々々所縁を聞かば、小紫わか元結に初雪の、野風烈しく吹き來ても、解けて流れの勤の身、寄

る瀬を頼む浮舟様。こがるゝなどと夕霧の、唐舟を慕ひしは、小薩摩やうの物語。高い大和に谷川見れば、おてき可愛や所譯の上に、浮名をさらす更科様、小主水どうも言はれぬ思はく薄雲、奈良の都の七重八重桐、けふ九重様かほるの君様合に云ふ 辰彌かほるの君と思もよらぬ御口すさみ、その知らぬ、とんと打ちかけ引かぬ心か傳九郎詞引かぬといふは、心から骨から筋から胴骨からしつかり千勝詞實も不實も一座のやりくり、おつかけ押へ、口説の手管はくれ□なし(缺字)か同詞傳九郎へ此地へ通ふ賤が身は、戀といふ字を左手に握つて、伊達といふ字を總身に纏ひ、譯といふ字を額に頂き、首尾といふ字を五體に踏まへて通ふやつがれ。かけ合 尾上おう元より此身は河竹の、流れの身とは言ひながら、おてきの心に誠あらば、指切り髪切り唄たがひちがひに起請取交して心中たておいて詞これ君しませうかの。

同せりふ言葉

中村傳九郎

へかたじけない、その御一言に乗せられては、いかなるしやうの岩屋のお聖様又は越後のかうち法印石佛も、踊を躍る、やれこりや御南無阿彌陀佛。

かけ合せりふ

花村鶴之丞

へおう、もつともく、粹も月も、こつちの仕こなし、されば歌にも、しやんとしたこそ男はよけれ、舌たるいは浮世の捨者、買手の氏神、とりん坊の守御木尊と褒めて置いた。いようく。

同ことば

中村傳九郎

へそんならば、晩ほど茨木屋で逢ひませうによ。

一鶴之丞さばよ 一傳九郎おうよ 一鶴之丞さば 一傳九郎さばく、あまちよのさばよ。

右者中村座直之正本也

江戸堺町

もづや十右衛門板

女郎しこなし大踊

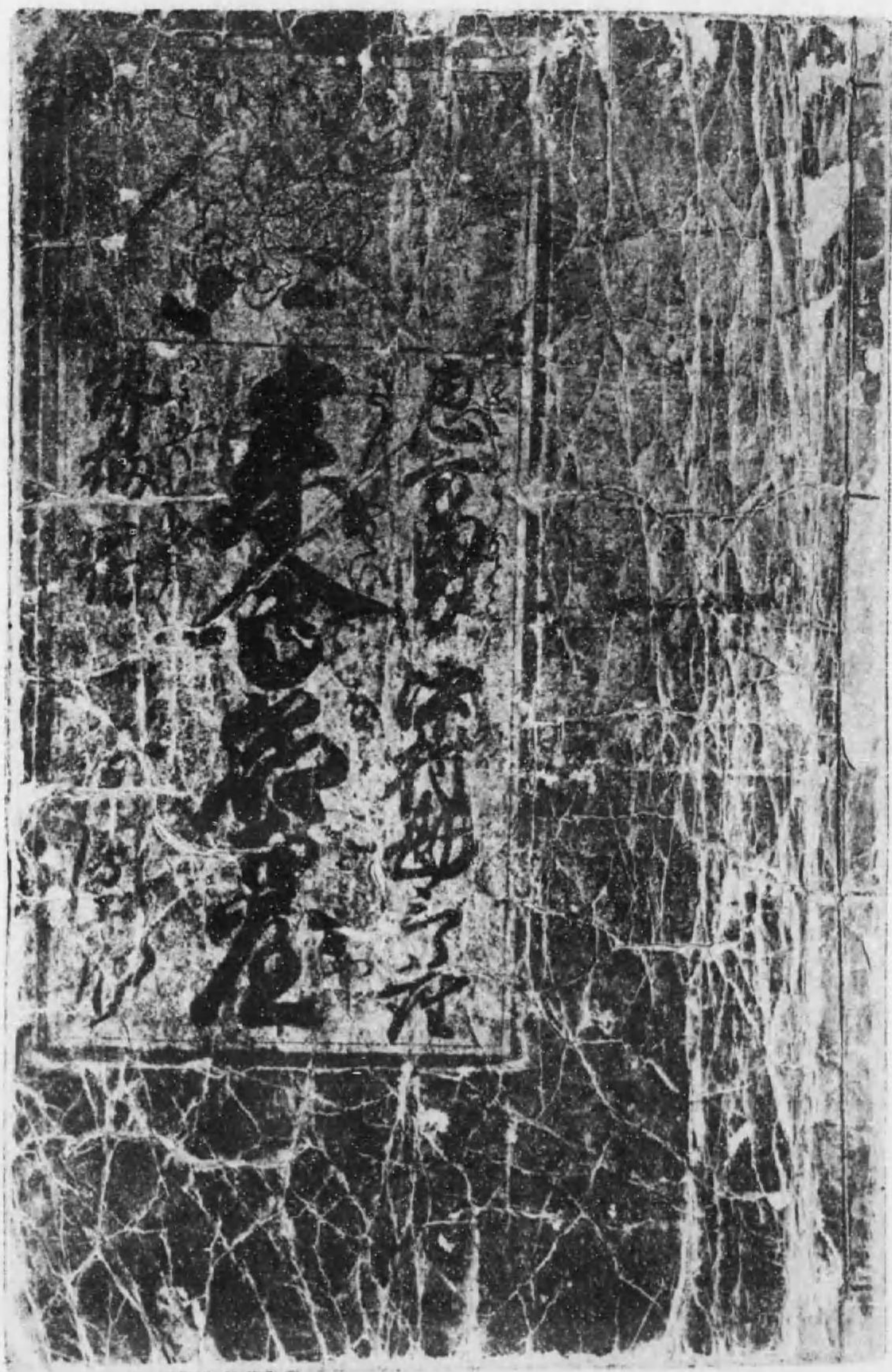
一踊 へ面白や、ときめく花の、新町は、色をうつして人々は、その行列をぞへ秋は牡鹿のつま戀ひかねてわかれ名に負ふ紅葉の下寝、月の桂のおのれと浮かれ、時しこそあれ今宵ぞ最中、明石狭衣袖きぬくの、移り香慕ふその名高橋高尾の姿、此君たちの踊なりふり好いかなればことばへ望みがござる。立役望みは何ぞ地所知入踊が所望でござる立役勿論々々合點ぢや。角内しげ介、お道具立てろ。まかせておける唄へ槍は柄長し、づんがらもんがら突いてくりよ。牡鹿の角のつがもない事言はんす。それに劣らぬお立ち踊が所望でござる。詞立役へもちろんく合點だ。殿はお立ちか大門開け唄へおもわけよや、買手の君は隙を求めて我が家を出でて、羽織かつがせ家重代の長刀、しやんと指したものを。扱それよりも買手の君は、空尻引寄せ、しや、ぶらり、し、乗つた、心のよければ長の巖を南頭に歩ませ行けば、俄に吹き来る風の音に、駒も進まず、のほんくのんはのふりよく、身ぶるひし、わななきて、進み兼ねてぞ見えたりければ、駒を彼處に乗り放し、大門口のな、扱茶屋の前ぬめれば、人のく目をさす、いよの、それも厭はぬ此身の果は、とても君ゆ



ゑい□(缺)のくぜつながらも、籬まがきに寄りて、痴話ちわの文ふみをば格子かうしの内うちへ、ちやうど家入やいりや、をさめた禿かぶせ遺衆やりのしゆに揚屋男あひやをとこや出たよな。立役たちやくへせうかのく、これくしましよかの。唄うた爰こゝに一つの話はなしがござる。詞はな話はなそかの。立役たちやくへよござんしよ。ゑんくくな。劔つるぎは箱はこに納せまめさ、べの世よの中なかなれば。その根ねをみがく矢數踊やかずをどりが所望しようでござる。詞立役たちやくへもちろんく合點あつてんだ。唄うたなんぼ隠かくいても在郷者ざいかうものは知れる、裾すそは小短みじかうて肩かたのゆきや長ながうて、色いろは眞黒まつくろで聲高こゑたかちや、どつこいくく。ちらし御代みよは千秋萬歲せんしゅうばんさい樂らくと、打ち治うちをさまりし、時世ときよめでたき。

右此本者

直之正本にて寫之令板行者也



元祿十年正月、中村座興行四番續狂言。作者は中村明石清三郎と元祖市河團十郎。團十郎はこの時三十八歳であつた。四年振に上方から江戸へ歸參して、其初舞臺に演じたのがこれである。(「金の揮」による)

此作は足利義政の子春王の叔父正親町太宰之丞が主家を横領しようとするお家騒動物であるが、中には注目すべき趣向が多い。即ち第二番目の北野天満宮社頭の場で、太宰之丞に扮した山中平九郎が大福帳の繪馬を取下さうとするのを、不破伴左衛門に扮した團十郎が揚幕から「暫く〜」と聲をかけて之を止め、舞臺に現れて大福帳の「ツラネ」をする、是が實に市川家十八番の一「暫」の初演である。又第三番目には名護屋山三と不破との「鞘當」があり、續いて「髮梳」があり、「草履打」がある。第四番目には團十郎の鍾馗が太宰之丞の悪靈を退治する超人的の働きを見せる。かうして團十郎は此劇を通じて實事と荒事との兩方面に互つて活躍して居る。其他太宰之丞に扮した山中平九郎も名護屋山三の村山四郎次も、梅津掃部の中村傳九郎も、葛城の荻野澤之丞も、皆よく活動してゐる。要するに内容の豊富な、變化に富んだ作である。

次に注意すべきは此書の奥書で、これによつて挿繪と本文とによつて芝居の詳しい筋を示す繪入狂言本なるものとしては、實に此の書が其陳吳であつた事が解る。是以前の物は、前掲の「椀久浮世十界」のやうな形式のもので、筋は示さなかつたのを、此書より其方面に筆を向けたのは、恐らく上方狂言本の形式に倣つたのであらう。挿繪の筆者は明かでないが、此書に畫かれた不破や葛城の姿を「風流四方屏風」(鳥居清信畫、元祿十三年刊)の巻頭に載せた團十郎や第八圖に入れた荻野澤之丞の姿態と比較すると、構圖や筆致が酷似して居るから、やはり清信の筆と推定してよからうと思ふ。



一源の春王 袖崎田むら
 一月 照 姫 ふじ本門之丞
 一腰元 あげまき 岡田小才次
 一同 きぬた 瀧井京之介
 一名護屋三郎左衛門 田むら小三郎
 一名護屋山三郎 村山四郎次
 一 小姓 むめ や 中山初之丞
 一同 せき や 袖崎村之介
 一同 しげ や 上むら平七
 一同 ゆき や みつせかもん
 一 赤松 入道 中島勘左衛門
 一 仁木 入道 田むら平八
 一 正親町太宰之丞 山中平九郎
 一 一きせ川軍平 杉山勘右衛門
 一 荒川 彌市 山本源左衛門
 一同 名こ 丸 岡田九郎左衛門
 一 櫻 丸 生 島 大 吉
 一 山名 左衛門 大くま宇太右衛門
 一同 名 三木之丞 市川團之丞
 一 葛 城 荻野澤之丞
 一 禿 う て な 小の川 おりゑ

一傾城 志賀崎
 一同 まさつね
 一不破 伴左衛門
 一女房 藤が枝
 一妹 もなか
 一腰元 おかれ
 一同 おきち
 一同 おせん
 一生薬屋兵次
 一妹 こなみ
 一御師四郎太夫
 一傾城 柏木
 一禿 たより
 一傾城 八重桐
 一わりて たま
 一岩越 主計
 一不 破 伴 作
 一小 草 履 取
 一同 彌五太夫
 一梅津 掃部

袖岡八十郎
 藤山花之丞
 市河團十郎
 袖岡政之介
 袖岡みやこ
 上村萬三郎
 初島きよ三郎
 中山たつや
 中山清五郎
 外山くも井
 西山く兵介
 西こく兵介
 桐山政之介
 玉川千十郎
 袖岡半之介
 さこん伊兵衛
 瀧井源右衛門
 中村勘三郎
 中川半三郎
 山下三九郎
 村山源次郎
 中村傳九郎

勢梅宿 參會名護屋

第一番目

一つ爰に一陽來復時なるかな。義政公の御式目終つて、正親町太宰之丞天下を預かり給ふ。然れば春王君に當年よりは代を譲り給ふ。伺候の武士には、山名左衛門名護屋三郎左衛門仁木入道其外の若侍烏帽子ならべて伺候有り、例年のごとく春駒踊有り。

扱太宰「いつもは某が飲み春王にさすが、當年は春王盃を頂かん」と有り。春王「いや、お前の盃を頂き申すべし」伺候の武士も「此儀尤」と有り。太宰の盃を頂き給ふ。「扱皆是よりは春王が代ちや程に、忠功を勵むべし。扱名護屋三郎左衛門は隠居をいひつけ、其方伴山三郎を出仕さすべし」三郎左衛門悦びけり。さて各にて萬歳をうたひけり。仁木入道申すやう「太宰様へ御目見えの者がござります。私面體よく存じ候座頭でござりますが、御慰みに召かへられ、尤と申し上げる」太宰「此儀よからん」とあれば、座頭出づる。「其方いかなること故眼が盲ひたぞ」「されば、

私世界を悟道いたし、武藏野の淺茅が原に居住仕り候處に、不思議に慢心あらはれし故にや、天狗につかまれ、其物語仕り候へば、眼盲ひ、今此國に立ちかへり候。其かほりに、五音通用三妙を得、六通をあらはし候。由なき昔語り」と云ふ。太宰「扱々難行をした奴」とて、檢校になし給ふ。座頭申すやう、「いや〜勿體ないこと。此屋敷は三年の内に鹿の臥處となり申し候。中々假の富貴はうけ申すまじ」とて、歸らんといふ。皆々とゞめ「扱も不思議や、何故屋敷は亂るゝぞ」「されば當御屋敷の南に寶藏あり。此ほとりに用水あり。情なや、此ほとり龍宮の東門に掘りあてたり。さるによつて、龍宮よりの魅込有り。此水に近づくものは、あるひは同志打不忠の人作悪心を挟むものはそれ故亂證」と云ふ。太宰聞き給ひ、「不思議なる座頭かな。先づはじめて参り寶藏用水のあるをよく知つたことかな。それはどう祭り致すればよいぞ」「さればかの用水をかいはし大般若を誦し、行ひあらば、何事も候まじ」「しからは行ひさすべし。いよ〜重寶なる座頭かな。屋敷に足を止めよ」「屋敷は太平に治まつた。龍の都喜見城の樂しみ」とて皆々奥に入り給ふ。

さて名護屋山三三木之丞は御寶藏の番を勤め、互に知契の中なれば、昔のことを話しけり。所へ腰

元砧揚卷「お姫様よりの使おれが行く、おれが行く」とて争ふ。山三見つけ「何者ぢや」「お姫様よりの使に來り候」と云ふ。「何使ぢや」「今日は山三様三木之丞様の番ぢやによつて、内々頼みました如く、三木之丞に早う逢して下されませいと、御使に参りました」「扱はさうか」挨拶する時、三木之丞見つけ、「よう早く。お姫様をつれまして参れ」照姫出づる。山三を呼び給ふ。山三「かしまりました」とて、三木之丞に云ふ。色々いへども合點せず。姫死なんといひ給へば、是非なく夫婦の契約あり。所へ御師四郎太夫札を打ちに來る。皆々氣の毒がり給ふ。四郎太夫意地悪く長話したりけり。ない〜四郎太夫も見つけ、「かね〜聞きました」とて右の通を云ふ。「太夫通り者かな」として悦びけり。

所へ山名左衛門仁木入道在番の替りけり。皆々あわて、照姫を藏の内へ入れけり。山名「是よりは我々が代番にて候」とて、山名是よりが大切とて、藏の鎖を下す。山三三木之丞氣の毒ながら歸りけり。仁木「山名さて〜こなたの弟三木之丞殿は、若年なれども、侍」とて、四方の話をしたりけり。山三郎は、何とぞお姫様を藏より出し申さん智略に、狼藉者として來りけり。「奥方へ参り候」と申しけり。入道は奥方、さて山名は傍に忍びゐたりけり。三木之丞時分はよしと梯子をかけ、藏

の窓よりお姫様を出さんとする。山名仁木來り、「見つけた、狼藉者は三木之丞」「なぜ狼藉ちや」「藏へ梯子をさゝんとするは、定めて寶を盗まん智略と覺えた」山三來り「いまだ御藏の内の物があるやらないやら知れもせぬに、盗人とは何事ちや」仁木入道「しからは藏の内を詮議せん」と云ふ。山名尤とて、鎖をあくる。山三「いやく入道殿こなたは藏の内へはかなはぬ。忝なくも此内には天照大神其外日本諸神の申しおろした事なればかなふまじ。幸御師四郎太夫も參り申し候へ。一旦内を清め、其後詮議あるべし」とあり。尤とて御師を呼ぶ。三木之丞心得、藏の前なる香爐の獅子頭、番所の前をばづしけり。仁木は彌市兄弟に松明をあげさせけり。三木之丞四郎太夫天井の清めする。此内獅子の舞あり。すでに藏の内へ入りお姫様を幕の内に隠し、落しけり。「いよく寶は相違なし」とて申しけり。三木之丞寶を持ち藏内出づる。「見れば雲掃の太刀なし。いよく三木之丞が盗みたるに極つた。繩をかけ引くべし」とて、御前をさして上りけり。山名名護屋氣の毒がりけり。名護屋申す様「しかし是は御姫様のもしもの事も有るならばと思召し、自害せんと思召し、お姫様の手前にあらん」所へ月照姫出で給ひ、「いやく我が方にはない。三木之丞其方はおれ故に盗人の難をお被やる。是迄」とて用水に身を投げ給ふ所を、名護屋引上ぐる。跡より怪しき男一人

合點ちやとて驅け出す。山三左衛門捕へ、「己れは合點ゆかず。何様紛者か。様子を語れ」と申しけり。「私は此度用水をかいほす日傭の者にて候が、様子あつて是に居申し候」とて遁げんとするを捕へ、「眞直にいへ。褒美をとらせん」とあれば、「私は仁木入道に頼まれ、此用水かいほし、是より御藏へ通ひ道をほり申し候ひて雲掃の太刀を盗み取り候。この太刀さへ取り申し候へば天下は相違なく奪ひ取ると候。まだござります、又あの座頭もこしらへ者。あれは赤松が末流でござり、僞盲にて候。是も太宰様拵事にて御座候」と申す。「しからは究竟。斯うせん」とて耳呼して御前に上る。春王太宰「三木之丞雲掃を盗み取つたに極つたな」入道「なるほど盗み取り候。拷問して御問はせ候へ」と申しける。三木之丞「侍が拷問にあへばとて申すべきか」山三「げにとはさうぢや。是は檢校殿是に候御判じ候へ」と申しける。太宰「げにとはさうぢや。とくくと」申しける。盲申す様「考へませう。山名殿山三殿でも申しますぞ。どなたでも同類ちやと考へますぞ」山名を同類ちやと云ふ。「山三殿こなたも内縁があるによつて、三木之丞が同類ちや」と云ふ。山三山名「いやくそれでは知れまい、目をあいていへ」とある。盲「十九の年につぶれた目が開くものか」「是非開かぬか」とて、刀を抜きかければ開く。「さあ仁木悪心ちや」と云ふ。「證據は」と云



ふ。最前の井戸掘を出す。右の通を云ふ。「仁木悪心に極つた。大小を渡せ」として、大小を取り「繩をかゝれ」と云ふ。太宰見給ひ、「大小を取れば繩をかけたも同事」赤松「官も殺しては太刀の在處知れぬ。まづ己れら命を取る筈なれども、云うても大將の慈悲ぢや。國中を拂へ」と追放はる。春王「扱山名其方大切な番を勤め、雲掃を失ふ段、まづ出仕は無益。扱山三郎ことは武士の道は忘れ、晝夜色町とやらんへ通ふ由、重ねて出仕は無用」扱山三「委細かしこまりましてござります。とてももの訴訟がござります。是なる三木之丞と月照様には夫婦の契約まします。御許し下されませい」と云ふ。太宰「成程夫婦にする」月照喜び給ふ。扱山三は一先づ屋敷を立ち退きけり。いよいよ館長久萬歳樂として悦び給ふぞめでたけれ。

第貳番目

一つ春麗かにして、伴左衛門女房藤が枝、妹もなか、其外腰元かね、お吉、おせん、みなく打連れ北野こそ當年の惠方とて、のめり歌あり程なく北野に着きにけり。藤が枝妹、當年の惠方とて、袖を列ね參詣夥しき、みなく繪馬などを眺め給ひける所へ、十七八の女房來り、文箱を内陣へ投げこ

み、鉦の緒に捨身と見えける。藤が枝腰元皆々止めけり。所に宮主梅津の掃部大進は社人引具し來り、「見ればいづれもの伴とみえて候が、何者の死をば遂げらるゝぞ」藤が枝「私が伴にてはななく候。參り合ひ候故、かくは止め候」掃部「最早身が目にかゝつてからは、詮議をせねばならぬ。仔細はいかに」と申しけり。社人「是に文箱がござります」披き見れば金子五十兩有り。掃部通り者にて、「是は色ごとにて候はん」「さればこなたの縁組の印に參り候が、下男のある故に、それを氣の毒に思ひ、所詮此金を奉納し、最期と見えて候」かの女「私は左様の事ではござりませぬ」「どうでも様子をきかねばならぬ」「然らば話しませう。私が兄様生藥を商賣なされますが、さる方へ此金にて毒を賣り候故、あまりそら恐ろしく思ひ、かやうく」と申しけり。「さてはさうか。其兄こそ邪者よ。我々が見つけ申す上は相違はない」女申す様「いまにも兄様のござりますれば悪うござります」と云ふ所へ、兄來り妹に金の詮議する。「其金は是に有る」とて渡す。金を請取り歸らんとする時に、掃部兄をとめ、「詮議が有る。今靜謐なる世になぜ毒を賣つた」とて詮議をする。兄「毒は賣る作法があつて賣つた」とて、買に来る人形を出す。見れば伴左衛門が人形なり。藤が枝肝つぶし、「何を包み申すべし。私は伴左衛門が女房なり。惠方參に來り候が、かやうなることは

伴左衛門はいたさぬ者にて候が心得がたく候。私わたくしは是これより此人形このひとがたを持ち伴左衛門はんざゑもんに對面たいめんし、右みぎの通とほりを詮議せんぎすべし。この生藥屋きぐすりやは掃部かきん様に預け申し候。掃部かきん「しからば心得こころえぬことが有る。伴左衛門はんざゑもんが、春王様はるわうさま是これへ參詣さんぎの折柄せりから御酌ごしやくに立つなり。其折柄そのせりから某それも詮議せんぎ申すべし、それ迄まではさらば」とて、皆々みなみな肝きんを消けしにけり。

爰こゝに太宰たさい之丞のじやうは侍さむらいどもを引具ひきぐし、是これも北野きたの參まゐり。侍さむらいども「是これよりはちと徒歩かちを拾ひろふべし」北野きたのの社やしろに取とりつ。「今日けふの奉納ほうなふに此この雷いかづちと云いふ名劍めいけんを掛かくべし。見みれば大福帳おほふくぢやうと有る繪馬えまが有る。是これは誰たれが上げた」主計かずへ申まうす様やう「是これは春王君はるわうきみの奉納ほうなふ」と云いふ。太宰たさい「扱さては伴左衛門はんざゑもんが計はからひであるべし。面倒めんたうな賣買人ばいばいじんのやうな見苦みくるしい。引刺ひつはさん」と飛とびかゝり、下くださんとするに、「暫しばくく」と止とむる。太宰たさい「止とめるは誰たれぢや」軍平ぐんべい申まうすやう「あれは伴左衛門はんざゑもんでござりますす」「繪馬えまを掛かけかゆるに、なぜ止とめる。呼よび出だせ。仔細しさいを問とはん」と有る。伴左衛門はんざゑもん大紋おほいもんを撓たべつけ出いづる。まことに一花いっけ開ひらけてより猶なほ御惠ごめぐみの四方よもの春はる、壽ことぶきの臺詞たいし有あり。太宰たさい「めでたい。しかし身みが繪馬えまを掛かけ換かへんとするに止とめる。身みが繪馬えまは忝かたじけなくも禁裏きんりにて雷いかづちを從したがへた劍つるぎぢや。春王はるわうが奉納ほうなふには是これがよい。大福帳おほふくぢやうは上げられまい。又大福帳またおほふくぢやうに威光いこうでも有あるか」伴左衛門はんざゑもん「愚おろかなり。そも大福帳おほふくぢやうの威光いこう。先大、

萬物ばんぶつの頭掩かしらおほつて外ほかなきを大おほとよませ、一いちを書かき人ひとを加くへて、天地てんち乾坤けんこん宗廟そうぼう是これ大おほとす。又福またふくとはさいはひとよまれ、偏へんには示しめすと書かき、旁つくりには一口ひとくちの田たとかけり。神かみの惠めぐみを下くだへ示しめすの理ことわり。是大福おほふくにあらずや」「扱さて又帳またぢやうとは」「知しらずばことを問とひ給たまへ。帳ぢやうは是長久これちやうきうの長ちやう、偏へんに巾きんと書かいて、旁つくりには長ちやう。是これをさとよませ。天地人てんちじんの三才さい法報應ほうほうおうの三身さんじん武家ぶけには弓矢ゆみやの柱はしら。佛法僧ぶつぽうそうの三寶さんぼうにあらずや。民家みんかには大福帳おほふくぢやうかゝる尊たうとき繪馬えまに上うへこす繪馬えまはおりやうあるまいと思おもふ」太宰たさい「尤もつともちや、尾おに尾おを付けていへば、何なんでも天地てんちの内に威光いこうのない物ものはない。身みが劍つるぎに上越うへこすはあるまい。夫それを上げい」軍平ぐんべい上あげんとする。不破ふは「お待まちちやれ」。忝かたじけなくも春王君はるわうきみの代參たいさんなれば、身みは主君しゆくんよ。扱さて又大福帳またおほふくぢやうは誰たがはづした」彌市やいち「太宰様たさいさまかはづしやりました」「誰たがはづした」其時そのとき太宰たさい「俺おれがはづした。伴左衛門はんざゑもん、俺おれは粗相そさうな。俺おれがはづした。侍さむらい共ども掛かけい」不破ふは「いやはづした者が掛かけたがよい」とて、なんなく伴左衛門はんざゑもんに叱しかられ、太宰たさい繪馬えまを掛かける。「伴左衛門はんざゑもんとてものことに歪いがみはせぬか見てくれやれ」太宰たさい掛かける。太宰たさい「あつばれ伴左衛門はんざゑもん侍さむらいぢや。定まめて其方身そのほうみが頼たのむと云いうたらば引ひくまいな。逆心さやくしんの根心ねこころを云いふ。伴左衛門はんざゑもん「盗人ぬすびとめ」と云いふ。太宰たさい「誰たが事ことぢや」「あの繪馬えまの熊坂くまざかさ。あれ盗人ぬすびとでござりますす」「成なるほどあの繪馬えまはよう畫かいた。見みれば宵よひより遊君ゆうくん居ゐる彼の牛若うしわかの小童こわらを狙ねらひける



こそ恐ろしや。伴左衛門は牛若、太宰は熊坂。あの熊坂は運盡きたらんが、身は運は盡きぬ」
 是より熊坂語 なんとなく思ひもよらぬ後より太宰を討たんとする。皆々とめる。伴左衛門は牛若、太宰
 は熊坂、みんな盗人として笑ひになる所へ、春王梅津參詣有り。春王色を見給ひ、「伴左衛門叔父様の
 機嫌を損うたか」と叱らる。いや〜」太宰「身が伴左衛門に粗相を云うた」伴左衛門「私め
 が慮外を申し上げました」「毎年の如く銚子。」とて上げる。伴左衛門酌に立つ。掃部色を見て「伴
 左衛門酌に立つか」「いかにも立つ」掃部「其酒は毒ぢや」と云ふ所藤が枝來り、伴左衛門に討つ
 てかゝる。伴左衛門「何ゆゑ身をば討たんとする」「君に毒を盛る。毒をかつた證據が有る」とて、
 かの人形を出す。「なるほど伴左衛門が紋所三升なり。しかし頭が違うた。頭は總髪ぢや」とて争
 ふ。太宰「いや〜それは證據にならぬ。とかく伴左衛門酒をのめ」と有る。伴左衛門飲み死す
 る。太宰掃部に向ひ「最前よりの巧みは、みんな身が巧んだ。一味せよ」とある。主計いろ〜諫
 言云ふ。掃部御幣を持ち、伴左衛門を蘇生と祈る。忽ち不破蘇へる。皆々悦び、皆々打散らしける。
 扱藤が枝春王の御馬引出す。春王頓て馬上なり。伴左衛門掃部「我々奴にも侍にもならん」臺笠立傘
 行列館へ歸り給ひける。

爰に掃部が若衆櫻丸掃部が庵に來りけり。「ものまよう」と云ふ。彌五太夫肝つぶし「扱も〜
 すさまじいものまよう」とて見れば櫻丸なり。「掃部殿は何してぞ」「頃は浮世つれ〜に心をよ
 せてござります」「少見舞ませう」掃部「我好色庵に取り籠り、好色分けの一道を綴り、尤吉田の
 法師が下戸ならぬこそと云はれた其様には書かれぬによつて、上戸なるこそ男はよけれと書かう」
 是より淨瑠璃梅に腰掛けたり。「人音がする」とて見れば女なり。彌五太夫「天人ぢや」といふ。櫻丸
 は「梅の精ぢや」と云ふ。掃部見て「あれは葛城なり」行かんとする。櫻丸塞いて遣らす。櫻丸「どつ
 から來た」葛城「分の里から來た。咄すことが有る」櫻丸「聞いてやらう」とて彌五太夫共に聞く。
 「おれは先づ可愛い男が有る。其男は名護屋山三。頃はすき〜來ぬとなと思や。文を盡くせど
 もつんと來ぬ。其又幫間男があるによつて、それに逢はうと思つてわざ〜來たれども、此男物を
 いはぬ。そここにくい男ぢや。いつそ抓々せうか」と云ふ。色々話せども、掃部も物いひたく思へ
 ども、櫻丸があればはず。葛城も「行かん」と云ふ。掃部拜む。「そんならものをいへ」と云ふ。掃



部是非なく「どうしたわけではへは参られた」「されば頃日は山三殿が見えませぬ。せめて此方様にあひませうと思ひ参り候」「然らば近々につれたたん」と、悦びける所へ、赤松仁木、山名追つか
 け来る。何者ぞと見れば、山名左衛門なり。「此二人が雲掃の太刀を持参した」と奪ひ取り、二人
 を生捕り「思案有り」とて長持の中へ入れ「是からはめでたき木遣ではやしてやらん」とて、皆々木
 遣にて城中さして急ぎけり。

參會名護屋なかけ合の第三番目下

一つ爰に分あり鳥原の廓の雪の白木綿降り、女郎の道中最中と見え、志賀崎まさつね皆々色を飾り
 けり。爰に不破の伴作は伴二人打伴れ出端あり名告有り生薬屋兵次郎は伴作下人となり、悪心はひるがへし、
 伴左衛門に奉公の由云ふ所へ、柏木と云ふ名女郎、これも雪降道中の禿たよりを伴なひけり。伴作
 見て「あの女郎は雪降に傘もさゝいで、さて〳〵狂言と見立てたり」浪右衛門も主馬之丞もいろいろ

ろ悪口を云ふ。柏木腹立て口説いろ〳〵申しけり。所へ下駄賣一人來り扱ひけり。伴作「何者ぢや
 と見れば、下駄賣。己れが知つた事ではない。そちへ退け」といふ。下駄賣「私も一つ買をも致し
 た者でござる。ひらに仲を直り下されませい」と云ふ。伴作「あまり其方は分のよい者ぢや。然ら
 ば仲を直りくれん」とて仲直り「しからは、今日は幫間に下駄賣を伴れん」とていふ。下駄賣「左
 様ならば商ひの値を下されませい」とある。伴作「なる程支へる事はない」下駄賣「面白い、小夜
 の衣に香はとゞまりて、とても浅茅の里近く」柏木「此歌はさる人のこしらへた歌ぢやが、よう知
 つてゐる、とも〴〵謠はん」とていふ。幸三味線を持合せたとて投節謠ひけり。所へ葛城は禿う
 てなを伴れ共歌を歌ひけり。下駄賣竹の子笠を被て、葛城をのぞく。「あ、扱金がほしい」と云ふ。
 葛城「此雪に三味の聞ゆるはゆかしいぞ」といふ。伴作「某なり」「扱は伴様か」「柏木様か」「こ
 れへ葛城様借り申さん」といへば「心得た」といひしなに、足駄の鼻緒を切る。下駄賣早くもはか
 せけり。葛城「山三殿うれしい」と云ふ。伴作「山三とか、これは賤しい、さもししい、所在ぢや。
 しかし晩に禮をいはん」といって揚屋へ行き、名護屋は後に残り「無念な、足駄賣となつてあれば
 己れまでが見こなす。身も名護屋山三と云ふ侍ぢや。そちを見ようばかりに此體になつた」伴作見

て「こなたは山三殿か」山三いろく隠す。「私は伴作でござる。伴左衛門がいひ付により、迎に参り候」と云ふ。「扱は左様か。しからは御意次第」とて、屋敷をさして急ぎけり。

扱又不破の伴左衛門女房藤が枝を若衆の形にして、下人打伴れ寛濶なる風情にて是も廓に來りけり出端あり「なに女房ども、いや女房ではない。丁稚來いよ〜」いろくしこなし有り揚屋をさして急ぎけり。所へ名護屋山三は三木之丞を下人として、是も葛城忘れず、又もや通ひ廓なる、島原に着きにけり。是も出端有り「なに丁稚來いよ〜」三木之丞「いやおれは丁稚ではない」「なんぢや」「おれは此方の若衆さ」「それでも丁稚ぢやによつて、丁稚」「いや〜最早丁稚ではない」とて、草履編笠捨てにけり。名護屋「大事な。是からは意地ぢやによつて、俺が草履も持つ」とて、草履取つて急ぎけり。三木之丞見て「旦那が草履を取るものか。是が上下の魁ぢや」「拜む三木之丞丁稚になつてくれよ」「そんならばなつてやらう。それ程葛城が可愛いか」「誓文、若衆の前で云ふは如何ぢやが、可愛い」とて揚屋に行く。所へ伴左衛門來り、名護屋に當る。名護屋知らぬ貌にて通り、伴左衛門きかぬ男にて「侍に鞆當をして許さぬ」とていふ所へ、土手の上より梅津「扱つた。ひらにひらに」と云ふ。此内淨瑠璃三人顔を見合して、是は〜とばかりなり。伴左衛門「いや是掃部、此方

の春王様より扶持頂戴し、神職を勤める身が鬘を薄く剃り、これはどうぢや。ことに名護屋お手前は一度君に勘氣をうけ、それ故身が申し直し、歸參めされた所に、悪所通ひは何事ぢや。意見に來た」名護屋掃部目を見合せ、「意見に伴左衛門が形を見よ。寛濶な」伴左衛門「是を見よ」とて草履取を出す。掃部「よい小草履取ぢや。美しい」と云ふ。伴左衛門「粗相をいふな。身が女房ぢや」掃部「扱も久しや」女房「伴左衛門殿が悪性でない證據。殊には意見をいひませう爲に、女の髪を切り、かやうに参りました」「さやうなれば忝い。思ひ切り申すべし」伴左衛門「忝い。然らば、屋敷へ歸り申さん。重ねて來る事はならぬぞ」山三「重ねて來ることはならぬ」掃部「なに山三葛城に暇乞ひをせぬか重ねて來ることはならぬ」「如何にも暇乞ひがしたいけれどもかなはぬ」伴左衛門見て「それ程葛城がかはゆいか。然らば身が仲人となり、葛城を請出してやらうが、なんと山三郎が妻にもなりさうな者か」掃部「器量骨柄どうもいはれぬ」そんなら請出し申すべし。重い金も持參致した「伴左衛門」とてももの事に葛城が心入を引いて見たい」掃部「げにとはさうぢや。心が引いて見たい。掃部もいひかねては有るが、伴左衛門引いてたもるまいか」伴左衛門「それはなるまい」掃部「とてもからは」と頼む。「然らば」とて打伴れ「先伴左衛門一人參るべし皆は中



の町に待ちたまへ」とて、勇みながらも急ぎけり。
揚屋には藤が枝は次に控へけり。所へ葛城「いやらしい男ぢやわ。さてもく地話もならぬわ」藤
が枝「傾城は力持をするかして、地ばなしがならぬといふ」葛城「汝は誰ぢや」「俺は草履取ぢや」
「これもいかい風さうな」とて、いろく悪口をいふ所へ、伴左衛門「此上女郎肝心の事が婿が明
かぬ」藤が枝「婿が明かぬとは床入か。それはいらぬ物」伴左衛門「女郎平に婿を明けい」「いや
おれには男がある」「名護屋山三か、されどもそれはよう知つたわいの。男持ちながら勤はなせす
る」「それが勤ぢや」「いや、盗人傾城」とて、伴左衛門が髪を解く。藤が枝「伴左衛門いよく心
中は知れた」「これ葛城おれが娘にする。身は伴左衛門とて、山三と相役ぢや。そなたの心を引くば
かりに来た」葛城喜び、「それは實か。嬉しや」とて喜ぶ。「山三を呼びにやらん」とて、藤が枝
を呼びにやる。葛城喜び、伴左衛門「それ程山三がかはゆいか」と云ふ葛城なじみの「是は又さうと
知らいで、髪までほどきました」「さうか、大事な」「いや申しても親分のこな様の髪を勿體な
い。結うて進ませう」とて、櫛鏡出し髪結ふ。伴左衛門鏡の内より葛城を見て、うつかりとなる。
葛城「是は」といふ。此内思ひ入れ有り「いかう痞が上つた」葛城背中をもむ。「いや腹ぢや」といふ。葛

城手に入る。其手を取り「どうもならぬ、先程より器量といひ、立振舞ひ、どうもならぬ。山三
が屋敷へ来てはならぬ。ちつとの内に情を」といふ。葛城「また心を引いて下さんすか」といふ。
いや眞實ぢや」とて指を切つて渡す。葛城肝をつぶし、「是は眞實か」肝つぶし遁げんとするを捉
へ「平に」といふ。伴左衛門火を消し、葛城遁げる。捉へ帯を解く。其内葛城帯をたづね、また捉
へ「是非」といふ。又遁げんとするを捉へ、殺すとして刀を胸に當てる。葛城「そんならたつた一度
ぢや」といふ。「一度で思ひ切らん」といふ内に、刀を取り、伴左衛門を追つかけ行く。伴左衛門遁
ぐる所へ掃部山三藤が枝皆々来る所に、葛城伴左衛門を追つかけ来り、皆々「これは心を引いたか、
大出来ぢや」とて喜ぶ。葛城「いやさ、心を引くばかりではない。大きに惚れたとさ」「惚れたと
いうたか、面白い」葛城氣の毒がり「是伴左衛門殿がおれに惚れたとて、指まで切つてよこしやり
ました」山三指を見る。「伴左衛門手を出せ」といふ。右を出す。「いやさ」とて左を見る。「成程切
つた」掃部「料簡はないか」「いや、ない」「伴左衛門先程より夫婦の心遣は忝いと禮をいうた所
に、葛城に惚れた汝、侍でない。汝討つても腹が癒らぬ」とて、草履にて散々たゞく。藤が枝
「なる程山三殿が道理ぢや、葛城殿こなたは傾城ぢや、こなた一人をなんと思はう。情を所在にし



やるからは、心入れにありさうな事ぢや。處に伴左衛門は草履で叩かれたによつて、死んでも飽かぬ。侍は廢つた。というて、靡かしゃいではないが、盃で思ひ切れとあるならば、思ひ切るまいものではない。此方故に、おれも女の髪を切り、この様になつて来たは、此方故ぢや。其伴左衛門をでかしたてな、脇差を抜て追つかけると云ふことがあるものか。伴左衛門殿此方には大小はいらぬ。よこしや」とて、大小を取る。「暇をくだされ。死ぬる。随分葛城に惚れ畢せさつしやい」とて、腹切る。皆々止める。「止手はあるまい」とて死ぬる。伴左衛門死骸に取りつき歎き、「名護屋々々汝草履にて打つた。なぜ劔戟を以て刺殺さぬ。今死ぬ女房に顔を合はせることがならぬ。汝飛びか、つて殺すも知つたけれども、汝が様な人でなしは殺さぬ。腹切り女房に言譯をする。其代りに七代子孫を取殺す」とて、腹切り死する處へ、伴作大童になつて來り、討たんといふ。「兄の敵ぢや」掃部止め「伴左衛門が誤ぢや、諸事は身が宅で話さん。此方へ」とて、涙ながらに人々は掃部が方へ急ぎけり。

第四番目

一つ爰に變りし有様は、正親町殿並に軍平藤八彌市郎はいつしか法に心をよせ路頭の身となり、北野邊にさまよひ給ふ。されども彌市藁苞に焼飯を致し、太宰殿に奉る狂言有り暫く露を枕になし給ふ所へ、山三葛城道行説經にて出る。七本松に着きにけり。葛城歎く。山三「思ひ定めて死ぬる事なれば、歎き給ふまじ」とて、最期の折柄、側に臥し給ふ皆々勤の折節。山三「僧と見請けて候。御回向を頼み候」とて既に最期と見えし時、梅津三木之丞馳せ來り「君の御意を以て參る。早々屋敷へ歸り給へ」「辭退は恐れ、ともかくも」とて行かんとする時に、太宰「身を見損じたか。太宰之丞ぢや、己れら通さぬ」とでいふ。山三掃部三木之丞早々皆々斬止め、屋敷をさして急ぎけり。名護屋が宅には、山三葛城萬事の床に臥しにけり。忝くも春王君、山名左衛門御伴にて、御見舞まします。葛城「冥加もござりませぬ。最早御歸りましますべし」春王「少伽致しえせん」と有る。「ありがたし。御茶道御藥持參候へ」と有る。不思議や屍藥を持ち出づる。又伴左衛門雪と消えにし恨の程葛城に打向ひ。此内いろ／＼、山三立ちあがり、散々に切り散らせば、又伴左衛門が女房現



はれ、山三に恨みの所作有り 所へ掃部神道高間雲極祈り祈られ、立去りけり。所に雲中より七頭の牛に、死して久しき太宰之丞竝に赤松仁木入道現れたり「あら珍しや。春王掃部神力のまことを以て考ふるに、太宰之丞にてまします。もと我は楠木が精魂。山三郎は大森彦七が障碍、雲掃ひの名劔を取らんとて来りたり」不思議や北方より、又伴左衛門現はる。「まことは我伴左衛門にあらず。佛法守護の鍾馗大臣、王土安全の爲、假に人間に交はる。まことの姿見よ」とて、鍾馗の精靈現はれ給ふ。七頭の牛飛んでかゝれば、降魔の利劔に切り随へ、二匹のもかなはず遁ぐる、楠木が精魂忽ち随へたまふ。法の道の曇なく、天下太平萬々歳樂ぞめでたき。

右此本は座中惣子供立役拍子方不殘淨瑠璃説經せりふことば所作直之正本を寫し一字一點無相違令板行者也今迄狂言本あまた出候へ共夫とは大に違ひ則ち狂言次第一番目より四番目迄役人の申すことを書寫出し申候御求め御覽可被成候

元祿十年丁丑二月上旬

狂言作者 中村明石清三郎
市河團十郎

さいひ町東横丁 かいふや開板



— 解 說 —

元祖市川團十郎が上方から歸參したのは元祿十年である。當時江戸の劇壇は、彼が出演した中村座が中心で、正月狂言に前掲の「參會名護屋」で當り、三月は「一張弓三韓退治」で、團十郎が百合若を勤めて好評を博し、次いで五月の節句から改めたのが此の作で、是も亦大當りを取つた。

此作もやはり團十郎中心で、彼が得意藝の一つであつた會我五郎の活躍を主眼としたものである。第二番目に「對面の五郎」の場があつて、五郎は工藤を討ち得ない自己の非力を悲んで不動を念じると、忽ち勇力を授かり、それから三七日の荒行中、初七日は新蹴七挺を引裂き、二七日には大竹を根こぎにし、三七日には五輪を碎き、と々相模川で元祖中村傳九郎の朝比奈との出會に怪力を示すのである。

三番目は碎けた世話場で五月節句に黒小袖一枚を着て逼塞して居る十郎に、虎が淺黄裕を脱いで着せる條や、五郎が石山源太の人形仕立で虎を屈伏させる場面などがある。四番目の「和田酒盛」の場の五郎と朝比奈との草摺曳は、後世行はれた各種の「草摺曳」の由つて起る處である。

尙注意すべきは、第二番目の切、五郎朝比奈相模川出會の場面に、團十郎の伴九藏が、山伏通力坊、實は不動の化現で現れる。これが實に市川家十八番「不動」なるものの初演である。九藏は此時八歳で初舞臺、引合せの口上は市川團之丞が述べた(金之揮)。挿繪は「參會名護屋」と同一筆かと思はれる。殊に五郎の活躍の模様が實によく表現されてゐて、狂言本挿繪中の白眉と稱すべきである。

「參會名護屋」も次の「關東小六」もさうであるが、此書の上巻と下巻とに分れてゐるのは、上方の繪入狂言本の「上本」と呼ぶものの形式に倣つたものらしい。



一頼朝	村山源次郎
一蒲の御曹司	中川半三郎
一和田の義盛	あふらかん六
一北條の四郎時政	大くま宇太右衛門
一江馬の小四郎	生島大吉
一秩父の重忠	田むら小三郎
一同六郎重保	袖崎田むら
一梶原平三	田むら平八
一同苗源太	中島勘左衛門
一工藤祐經	山中平九郎
一なとめの前	桐山政之介
一妹さつき	外山くも井
一腰元おちき	上村萬三郎
一同おむめ	上村小才次郎
一小林朝比奈	中村傳九郎
一醫王	岡田九郎左衛門
一祇王	山川彦五郎
一千葉彦太郎	中山初之丞
一おつ二郎	松本三彌
一梅尾大二郎	三つ瀬かもん
一清瀧左近	袖崎村之介

一ちご柳丸	嵐もん三郎
一つぼね	杉山勘右衛門
一八幡丸	山本源左衛門
一近江丸	中村清五郎
一御所五郎	袖岡政之介
一大磯少將	藤本門之丞
一化粧坂	小野川織江
一禿みちお	山下三九郎
一よし	山中勘三郎
一鬼三王	市河團之丞
一團三郎	市河團之丞
一まんよの姫	袖岡半之介
一とまわの丸	猿若山三郎
一箱根別當	西國兵介
一通力坊	市河九藏
一本田の次郎	瀧井源右衛門
一曾我の母	今村久右衛門
一二の宮姉	荻野澤之丞
一曾我の十郎	村山四郎次
一五郎時致	市河團十郎

兵根元曾我

第一

爰に清和の後胤源の頼朝は、豫々北條の四郎招待申度き由にて、吉日を選み御入り有り。御前には五郎丸醫王祇王三郎範頼公を始めにて各悦喜淺からず、則ち今日の勳功として一子小四郎に二階堂梅が谷を下されけり。「扱何か御もてなしと存じ候へども、さして變り申候儀これなく候。若侍衆に申付け相撲を興行致し候。それく相撲」とありければ、祐經秩父の六郎相撲つれ出づる。新入換へ取りにけり。時に梶原平三が侍蛙に掛けられ負けにけり。祐經「見えたか」と聲をかくる。梶原「見えぬ」と云ふ。範頼「いづれも何を争ふ、何をもつて祐經勝とは云ふ」祐經「さればでござります。君御存じでござりませう。俣野河津の三郎取組み有りしより、かはづの一本がけ始まりました。只今のは蛙掛にて候」と此内祐經すまいに古へ河津が事を思ひ出して泣く。梶原「其河津に付き君へ申上げたきことあり。御前近くに君を窺ひ申す敵が候」皆々驚き給ひ「其敵は誰なる」梶原



「されば一昨日、滑川の邊を巡見致しましてござれば、器物の内に君の御形がしるし有り、節々に大釘が打つて有り。取寄せ御覽候へ」と云ふ。範頼「見る迄もなし、如何ならん」と有り。頼朝聞召し「とかく祐信が憎い奴ぢや。げにとは、祐成は伊東が末、早くまゐつて誅伐いたせ」みなく討手望む。とかく「五郎丸にいひ付くる」とてある。五郎丸「一人にては心許なし、則ち祇王も参るべし」とて二人曾我へぞ急ぎける。あとにて三郎を始め、皆々訴認なされけり。所へ朝比奈五郎丸祇王をひつ立て来る。御所にて皆々騒ぐ。朝比奈「何故曾我一家の方へは討手を遣され候ぞや。先年秩父の重忠君へ訴認有り御助け。君子二言なしと申すに、又候や討手とは何事ぞ」と君を始め皆々を散々に怒る。君「おれもさう思へども、側に」とて梶原が顔を見てゐ給ふ。梶原頼朝を睨める、梶原有るによつて返事なし。朝比奈「君御存じなく候や。先年衣笠が城にて朝比奈和田が働き。とかく此度は曾我一家の命を是非に」と頼朝に取付き出づる。頼朝も是非なく「存じもよらぬ」とていへども、朝比奈が威勢に恐れ給ひて「然らば赦すぞ」とてのたまへば、朝比奈よろこび「有難し〜」上意を蒙り駒引寄せ打乗りて歸りけり。ゆゝしかりける次第なり。さればにや少女前は腰元數多召連れをどり有り「皆の衆田をしつけ給ふか」「いかにも大方しつけま

した。」然らば明神様に御禮申しませう。此方へ」とて急ぐ所へ、曾我の十郎來り給ひけり。此内淨瑠璃我も昔は某が子孫、せめて敵を討たん願とて、矢數を通して射たりけり。森の内より「したした」といふ。十郎「合點のゆかぬ」「した〜」といふ。十郎「合點のゆかぬこだまがあたつたか」と云ふ。「とかく敵を討つ吉凶が、えい、さるが中にも、戀と云ふものがある、江間の小四郎殿に深く思ひ入つてどうもならぬ」と、此内にも諸願成就のため、戀成就のためとて此方の杉に射たりけり。所へ少女いで、十郎「これは合點がゆかぬ女ぢや、なに故そこにゐた」「惚れました」「おれに惚れたか」と云ふ。「いや私はこな様の今いはしやました小四郎に惚れました。取持つてなされませい」「これは合點のゆかぬ。おれもほれた。戀は互ぢや」とて「取持申さん」と云ふ。「とかくおれ次第なり給へ」とて云ふ所へ小四郎見ゆる。「これ〜小四郎來る、おれ次第にせよ」とて云ふ所へ小四郎出づる。馬上にて出づる馬よ、十郎駒の手綱をひかへ「さて〜御前に少し申し度きこと御座候」とてほれた様子を色々口説く。小四郎承引する。「先づそれへ寄つてござれ。兎角神前にて起請を書くべし」と云ふ。所へ少女をはじめみな〜出づる。「十郎是は」「此女がみんなほれました」「いや」とめ「私ひとり、皆は戀を取持ちませうために、是に居ります」「しからばみ

なく、巫女となり、太鼓鈴鼓の役」既に神樂ぞ始めけり。小四郎は有難き御神託とて禮拜なす。神託が有りいよ、十郎兄弟の契約する。「よし又願が有る。汝にはれた女が有る。此戀をかなへてやれ」「それはどうもなりませんまい」「さうなければ取殺すが」十郎「あの御神託を聞きたまふか」「とかく夫婦契約いたしますやうに」と云ふ。小四郎「其女はそれに居ります。則ち巫女ぢや。巫女とどう夫婦になりませうか、ならぬ」と云ふ。十郎「いやをとめて候」「をとめとは」「はて平六兵衛の妹」と云ふ。「扱はさうか」「是なるは妹皐月、腰元にて御座候」とて、夫婦の契約する所へ、梶原が弟源太景季來る。小四郎「あの梶原は内々私に戀慕致し候。とかく某次第になされ候へ」と云ひて傍に忍びけり。所へ梶原下人召連れ明神に參り某は戀成就ならしめ給へ」と云ふ所へ、小四郎出づる。梶原色々どく。小四郎「某は先立つて兄分が御座候。御免し候へ」と云ふ。「其念者は誰ぢや」「はて」といふ。後にて、十郎「構へて某と名をなりの候こと御無用」と云ふ。小四郎是非なく「曾我の十郎」と云ふ。梶原「十郎ならば曾我へ參り身が直々にもらひ參らん」と云ふ。所へ十郎出で、色々問答あり。梶原小四郎に向ひ「あの謀叛人の末十郎と兄弟の契約有るからは君に對しての悪人なり。いで君へ訴へん」とて急ぎけり。十郎「さあ大事になりたり」とて、とか

く女中がた小四郎殿、是なる鳥居は大手に定め、齋壇は亂杖社壇な城郭、寄する敵相待ちにけり。梶原押寄する此内舞々、り「あれ打散らせ」と下知をなす。小四郎皆々先に進んで出でにけり。先づ一番に出でたるは、新川新五皐月の前に渡り合ひ、片足斬られ引いて入る。荒熊大六十郎に渡り合ひ、鼻面斬られて引いて入る。梶原追うつまくつつ戦ひけり。小四郎今は是迄と躑躅を折つて後にさせば、もとよりみやびたる若者の、相合ふ若木の花の色、かくれば籠の花も源太、我さきがけんとの心の花も宮居もてりかやき、面白や敵の兵むら／＼ばつと追つ散らし、妹背の中の花は根に江間は伊豆地にかへりけり。威勢のほどこそゆしけれ。

第一一番目

爰に鬼王團三郎は曾我の里より箱王殿の方へ急ぎけり。此内道行動三郎 團之丞仕候 やう／＼急ぎけるほどに、幡多村に着きにけり。かゝる所へゆしき大名打つて通る。見れば敵祐經なり。「如何はせん。見答められてはかなふまじ。團三郎は是に残り在るべし。箱王殿への參る衣を忘れたり。取つて歸らん御前見答めらるゝな」とて忍びけり。所へ祐經近江八幡を打連れ來りしが、彼處へ忍びし團三郎を

見付け「あつばれよき器量の若衆。それ引出せ」とありければ、團三郎出でて祐經にぬれかけ、隙を見て討たんといふ風情にて見えけり。祐經取つて押へすでに危き所へ、鬼王取りに参りし衣を着て座頭の姿となり團三郎に近付き、「何故斯様に打擲にあふぞ」「見れば座頭、いづかたへ行く座頭ぞ」と咎むれば「座頭ではない祐經、鬼王團三郎」といふ。「扱は曾我にゐた鬼王兄弟か推參な。汝が主祐成は、某を親の敵といふ由聞きたり。構へて身ではない。俣野の五郎討つた。身ではない」鬼王大切なる所なり飛びかゝつて討たんと惱みけれど、大切なる曾我兄弟の敵仕損じては如何ぞと面を和らげ「成程左様でござります。お前ぢやとも申します、俣野ぢやとも申し、とかく祐成は迷ひあります」といへども、團三郎は是非討たんと云ふを止め「御志有難うござります。所詮これにて腹切り相果て未來にて祐成にのり移り、俣野殿も祐經公へも推參」と智略あるこそ道理なり。祐經もさすがの侍「先づ待て、我等はさりと侍ぢや。左様な侍を身が目の前では殺させぬ」とて止めけり「構へて〜俣野ぢや」といふ。團三郎「汝ぢや」と討たんといふ。鬼王「汝は推參な。彼方ではない。討て棄てたい奴なれど、祐經様がお助けなされたによつて、又身が殺すは如何ぢや。構へて祐經様御心におかけなされますな」とて態とそだてて申しけり。祐經「身は御上使に箱根へ参る。鬼王團三郎

郎さらばぢや。必ず〜身が宅へも参れ」とて睨めて祐經急ぎけり。團三郎はかけ出でんとする。鬼王は押し止め、互に勵む忠臣の別れ〜になりけり。さればにや箱根の別當方には柳丸を始め同宿どもを近付け、「此箱王は何とした。さりととは〜不便なり行方如何」と尋ね給ふ所へ、伊豆の北條御入りとある。「北條が來ても逢はぬ。大切な箱王が見えぬと尋ねねばならぬ」といふ所へ北條入り給ふ。別當「よう御出なされました。もはや御歸りなされますがようござりました」と云ふ。北條「歸りも致さぬに、何故さやうにいそがしく候」と云ふ。別當申す様「されば、曾我より預りました箱王が見えぬ」と云うて泣き給ふ。北條「尤なり。其箱王に話す事が候」「何事ぢや」「其箱王私に烏帽子子に致してござる。餘り男になりたいたとござるによつて、男に致してござる」別當「此方には聞えませぬ。私に一旦の斷もなしに聞えぬ」北條「尤でござる。然らば逢はせませう」とて箱王呼ぶ。男の體となり鱗形の紋を付け上下で出づる。北條見給ひて「別當ごらうじませい、えい男ではござらぬか。則ち名は介五郎時致と申し候」別當「箱王今は介五郎と云ふか。汝は聞えぬ、なぜおれに露ばかり知らせぬ。汝とおれとは深い仲ぢや。今よりして誰をたよりにしよう。併しもはやかうなるからは随分武藝を磨け」北條「されば時致も望



が有るゆるる男に成りました。敵がござる」別當「其儀もさきだつて聞きました」五郎悦び「有難き御意でござります」と悦ぶ所へ祐經御入と云ふ。五郎敵が来れりとして顛へる。北條御覽じ「なぜ顛へるか」時致「敵を討ちませうか、あら嬉しやと思ひ斯様に具足顛がする」といふ。別當は「えい生擒つてくれん」とて大肌脱ぎて騒ぎけり。北條御覽じ止め給ふ。所へ祐經来り、北條「今日は御上使とござるか。私も當社へ參詣しました」祐經申す様「別當有難う思召されい。豫々君へ訴へてござるによつて、御造營恙なく仰せ付けらるゝ間有難う思召されい」と云ふ。内に障子のを(本ノマ、)箱王とらへて顛へる。祐經「何事ぢや」といへば、別當「あれあの如く鼠があたけます」「しかしそれに就き尋ねたき」といふ所へ、箱王茶を持ち出づる。祐經を睨めてこそは控へけり。祐經「はて當寺に曾我の箱王とて河津が二男が在るよし聞いてござる。その箱王がござるか」と云ふ。別當「いかにも居ります。是ぞ箱王」と云ふ。祐經「箱王とは其方か、身は工藤左衛門祐經ぢや。相應の用があらばいへ」と云ふ。箱王「有難うござります」と云ふ。北條「幸ひ私が烏帽子子にいたし介五郎時致と申します」「扱はさうか。それともに聞えぬは、なぜ身どもにも少しは知らせたるとて苦しうもあるまい。併し始めて會うた」とて證に小裁刀をくれる。箱王悦び戴くとて祐經

を討たんとする。祐經箱王が手を捉へ、合點のいかぬ何事ぢや。口惜しいと云ふは身に野心あつてか「北條、別當「先づお放しなされい」とて放す。「なか／＼若輩とて憎いやつぢや。あゝいかう痞が起つた。歸らん」と云ふ。近江八幡「いかにも歸らん」と云ふ。別當「ちと肩を寛げて進ませう」箱王「私が捻つて進ませう」とて祐經が肩を打つ此内祐經を討ちた別當「随分肩をうてと云ふが面白」北條「實に鳥類翼、なか／＼に親子の仲ほどわりない物はない。あれ燕が巢をくひ子をいたはります、あの軒にて。それに付き鳩や野鷹と云ふ譚がござる。昔孝謙天皇延暦年中に出羽の國に「不明」のかくせうとてあり、逸物の鷹を所持いたす。子を持ちたること五羽あり。帝へ聞え、右の鷹を捧げ奉る。其跡にて彼の鷹親子の別を悲み、それて飛び、阿古耶の松に羽を休め都へ慕ひ行かんとする。所に一つの悪鷲来りて彼の鷹を食す。此事都に聞え、親の敵を討たんとて八幡へ參り祈請しけり。所に鳩一羽これに與し陸奥へ下りける。或時かの悪鷲梢に羽を休め、討たんと思へども頼みし鳩が來ぬゆる、討たず」「重ねて折を得て心底をとげたか」と、箱王討ちたく思へども、右の話を聞き、扱は祐成なきによつて討つなと有るべしとて討たず。併し口惜しくや思ひけん、祐經に抱き付く。祐經取つて押へ「汝推參。汝が分にて祐經を討たんとや。北條殿悪い。鳩や野鷹の譚が



いやだ。祐成が來ぬに討つなとは御申しやれ、面倒な譚ぢや」とて「よく覺えよ、介五郎」とて鎌倉さして歸りけり。

時致無念餘り、驅け出でんとし給ふ。北條別當押止め、時致餘り口惜しがり、禮尊の枕として、泣き寢入に臥しにけり。別當北條「尤も、先づ酒なりとも飲ますべし」とて五郎を起す。不思議や顔の氣色變り、別當を捉へ「己が面をはつた」とて散々に叩く。「丁度此の様に祐經が叩いた」北條「何とも合點がゆかぬ。顔赤くなりたるは如何様な仔細」といふ。五郎「餘り無念さに心の内に不動を念じてござれば、護摩の煙の燻ると見えしが、色變りしよな。あら嬉しやなく、祈る印を勇力の、鬼ともなり神ともなり、本望遂げしめ給へや」山路をさして急ぎけり。

聞いたか〜とて別當團三郎出づる。扱々あの様にも赤く成るものかな。もはやこゝへ五郎が來る。凄じや。時致は大童の形となり、石段に上りけり。團十郎所作 荒行こそは恐しや。初七日は新鍛七挺引裂きけり。二七日には大竹根こぎにしけり。此内別當出で道化有 三七日には五輪を砕く。凄じや團三郎別當こなたへ御入り候へとて、皆々奥に入りける所に、通力坊 市川九藏 「生飯の所望」と云ふ。三郎出でて「小き坊主どつから來た」道化有 五郎見て、「小才覺らしい坊主かな掴み殺さん」

と言へば、忽ち消えてなかりけり。團三郎「只今のはもし化作にてあらん。よし魔障にもせよ、何にもせよ」とて晝垢離の其爲に相模川へと急ぎけり。此所奴四人にて 所へ朝比奈樊噲黒を引かせつゝ引請け〜飲みにけり 瑠璃 所へ五郎來り「某が垢離取場を汚すことこそ推參なり。いで驚かしくれん」とて川波に入りにけり。時に樊噲 黒驚きけり。朝比奈「何者ぢや、見れば若衆ぢや、どつから來た」「梵天國から來た」「扱もきつい若衆。いで一討」と追つつまくつつ戦ひけり。所へ最前此内浄の小山伏現れ「いかに兩人 構へて争ふこと勿れ。時致は不動に祈るその驗敵に逢ふまでは水際まさりの大力、曾我と三浦は一家の事。眞は不動明王なり。眞の形これ見よ」と此所市川九藏 兩人有難し〜。眞に現在にてかゝる不動の尊影拜み奉るとて、悦び勇み、兩人は鎌倉曾我へ歸りけり。

兵根元曾我 上之卷 終



兵根元曾我

第三

「一つ爰に鬼王その日の營みせんために、一把の藁に打つ槌の曾我の里に居たりける。所へ團三郎來り「是は奇特でござるよ。十郎様はどこへ御ざつた」「十郎様はどこへやら見えぬ。大方藁も打つた程に草鞋をつくらう」とて奥に入る。團三郎「餘り淋しい。此紙帳の内に入り寝ん」とて入る所へ、十郎謠を謠ひながら來り、紙帳の内に入らんとする。團三郎誰なると云ふ。「十郎様か。嗜まじやませ。謠どころではござりませぬ」とて叱る。「それはさうぢや。今日五月五日とて皆節句と祝ふに、扱如何なれば某は悲しい」とて泣く。「尤でござります。併し先づ口なりとも御祝ひなされませい」と云ひて重箱を出す。見れば柏餅なり。十郎悦び「嬉しい」悦ぶ。團三郎「是は餘り紙帳が損ねました」十郎「はて破れたと云ふは愚か。表に三つあれば内には十ある」「せめて帳つて進ませせう。飯糊」と云ふ。十郎「飯糊はない。猫の飯もない。此柏餅を飯糊にせん」とて飯糊にしけり。「紙はある。大礫の虎が所からきた文がある。古川に水絶えずぢや」とて反故をみて、又謠をうたふ。團三郎

「もはや大礫へはござりますな」とて色々意見を云ふ。十郎悦び「嬉しい。行くまい。しかし餘り氣が盡きて悪いによつて、酒を飲みたい」徳利を振り見れば、酒もなし。團三郎「私が調べて進ぜませう。暫く待たせませ」とて酒調へに急ぎけり。

十郎嬉文を見てゐたりけり。所へ大礫の虎淺黄帷子あさからぬ禿陸奥打連れて其場へこそは來りけり。十郎を見て泣く。「何しに來りたる」とて、色々口説有り。「遂に夫婦のなかくくに、頃日久しく逢ひませぬ故、それゆる、逢ひに來ました」とて悦びけり。「そなた馴れそめしも、昨日今日とは思へども、何様三年餘り」とて色々戯れあり。此内髮梳有り 淨瑠璃あり「扱今日は五日、節句ぢやといへども、見やれ此小袖ばかり着てゐる」とて黒小袖見する。虎見て「私が淺黄の帷子を着て參りました」我が帷子をぬぎ十郎に着せけり。十郎「此振袖は着られまい」虎「私が袖をきりて縫ひませう」とて縫うて十郎に着せけり。是では母の前へも行くゝとて悦び「其方はこゝに少し待ち給へ。母の禮を仕舞うて參らん」とて暇を乞ひて母の館へ急ぎけり。

所へ五郎來り「十郎殿内にか」虎「いや留守」と云ふ。「留守とは女の聲ぢや」とて見れば虎なり。「何しに來た」虎「愚な。十郎様に逢ひに參りました」「内々わけ有りとは聞いた」虎右の次第を云ふ。

「扱は母の所へ禮に參つたか。併しあの十郎はなか／＼俺が前では堅い間少心が引いてみたい」「いかにようござりませう。ぢやがそれでは十郎様の何とか思しやりませう」「それともに大事ない。俺がこゝに居ようによつて、こなたは後から付聲をして下されい。役者のするやうに身振を付けてしよう」として「併し天窓が如何か」として行燈を被り居たりけり。所へ十郎來り「虎居やるか」「誰だ」「はて虎大きな聲ぢや」「いや待ちかねました」と云ふ。十郎「扱々母には甚い悦びぢや。はてそなたの顔はなぜ此様ぢや」「はてこなた様の留守ぢやによつて蚊がくひます。大事の顔を人に蚊に喰はせた時にはならぬによつて、それでこの通りでござります」「さりとは忝い」「何とこなたには五郎殿が可愛いか、又虎が可愛いか。虎はいつでも他人ぢやによつて、身の中の五郎が可愛うござらう」「いやもうあの五郎めにはつとした。もうこなた可愛い」と抱き付き見れば五郎なり。「扱は五郎」として十郎逃んとする五郎「それが河津が子か。あさましい。こゝに置く事はならぬ。面倒な」と云ふ。虎「はて最前五郎様約束が違ひました」と云ふ。五郎「いやだ寄るな。女は嫌ひだ」として散々に叱る。十郎「もう彼があこのやうに怒つてはたまらぬ。來い」として十郎は虎を連れ傍に忍びけり。所へ少將 禿打連れ五郎に逢ひに來る。「五郎様／＼」と呼ぶ。「誰だ。女は嫌ひだ」と

て見れば少將、「どうして來た」「いや逢ひに來ました。頃日は世間も暑うござりますによつて、是の様に藥を貰ひこなたに進ませうとて持つて參りましたに、あのまつ嬉しうもなさうな顔は」として云ふ。五郎「何又めつたに男が嬉しがる物ぢや」此内色々口説有りつひに少將腹立て彼處へ棄てる。五郎拾ひ取つて戴く所へ、十郎來り「つけこんだ。やい是は五郎不義な、女は嫌ひだ。それで河津が子とはいはれまい」色々叱り返す。兩人とかく何を云ふも兄弟なかの好いと云ふからちやとてとく料簡をする。「いや虎少將是に居たではいかぢや。幸ひ今日は母北條方へ御越しなさるによつて、五郎が勸當を訴訟せん」として虎少將は大磯へ歸す。十郎五郎「なにおれが虎がえい」「いやおれが少將がえい」として、戯れながら北條の館へこそは急ぎけり。北條の館には五日の節句とて、まんよ姫を始め、時若丸の祝儀を祝ひけり。所へ曾我の母入り給ふ。「これ／＼時若殿へ恥かしながら祝儀」として萱蒲刀を出す。皆々悦び給ひけり。所へ十郎來り給ひ、團三郎を伴ひ出づる。十郎「扱今日は御祝儀御目出度うござります。私も何かな御祝儀と存じ候へども」と云ふ内に、まんよ姫團三郎に見とれて居たりけり。皆々氣をつける。まんよ姫「十郎様の御家來は扱々美しい」と云ふ。十郎「それ／＼兜を出すべし」とて出す。袋を取り見れば五郎が



石山源太が形になり、虎を睨み居たりけり。北條時若丸悦びあり。「扱十郎殿これは何者を斯様に致したものでござる」「いや是は高橋新左衛門後見石山源太荒王が風情でござる。邪慢我慢岩蔦とて東夷を傾けんとしたる業物を滅してござる。武士たる者はあやかり物でござる」「扱々潔い勢」母「今の世にも斯様なつは者があらうか」北條「當家に於いて、小林の朝比奈と申すも是程にはあるまい。さて〜氣味のえい有様」十郎「ござります。箱王は御存知でござりますか」「箱王とは」「はて、五郎時致こそ此源太には劣らぬ大力でござります」母「其箱王が事は言ひいたすな」といふ時に、兜しを〜と歎く。皆々「いや兜が動きました」十郎「はて動きます筈さ、ぜんまい時計でござります。絲の操をもつて動きました。只今働かして見せませう」とて「此絲を引くに從ひ、この人形が母様の前へ参りまして、兩足を折つて歎きます」とて、絲を引きければ言ひし通りなり。「また元の所へ参ります」とて絲を引きければ元の所へ行く。又「顔をしかめます」といへば顔をしかめる。母皆々よく造りたる物なりとて皆々奥へ入りけり。

所へ小四郎 盃 爛鍋持ち來り十郎にあふ。恨みをいふ所へまんよ姫來り、酒を盗み團三郎方へ向ひ「なう團三郎、其方を見てどうもならぬ」といふ。時致堪へかね「俺もならぬ。此處彼處が濡だらけ

ちや」十郎小四郎酒を尋ぬる。まんよ姫を見付け「これはどうした事ぢや」小四郎「姉様ちとお嗜みなされませい」「俺は嗜む程に、其方もたしなみや」十郎「もう詮議をすれば互に悪いによつて、いつそ團三郎 盃をせよ」と云ふ。まんよ抱付き給ふ。十郎小四郎に抱付く。五郎も餘り耐へかね、胴に抱付く所へ母御歸りといふ。人々驚き、まんよ小四郎は奥に入る。「今日は最早北條殿歸りませう」十郎兜に向ひ「最早お歸りぢや」時致「もし母様」と云ふ。母「さて人形が物を云うた。合點のゆかね」十郎「お前には五郎と思はしやりますよつて物を申しました。構へて左様ではござりませぬ。歸りませう」時致餘り堪へかね「もし母様介五郎めでござります」「何ぢや五郎ぢや、五郎と云ふ子はない。憎い奴ぢや。汝は身が心を背き、よくも男になつたな。汝がやうな悪い者は子でもない」五郎何故私が悪者とおつしやります」「悪者でないか、はて出家を背くは悪者さ」「もし母様。私は出家になりますれば、色へ偽つてなにも不足はござり。〔本ノママ〕男になりましたは、はて思ひがござりましたゆゑ」「なんぢや、思ひがあつてぢや。はて男になるは我儘をするによつて男になつた」「はて男になりましたは我は死ぬ心で成りました。敵工藤左衛門と討死致します心ゆゑさ。左様おつしやる母様此方が悪い者ぢや」「親に向つて悪者とは」「もし河津殿に別れて

は後夫に見え、もはや河津殿のことも忘れさつしやつた。五郎三つの時よりも、小弓に小矢を取添へ障子の紙を破りしも昔語。勘當は赦されず。只今腹を切ります。十郎殿跡は頼みます。私は腹を切ります。十郎「死ぬると我も勘當する」「なんぢや死ぬると此方も勘當ぢや」「はて勘當せねばならぬは、敵左衛門は大勢召し連るゝ。某は團三郎鬼王は有るにかひなき若輩者千騎萬騎とも思ふそちが死ぬるからは、俺は敵に返り討に討たるゝは必定。しからば勘當せねばならぬ。河津殿果てめさるゝ時分には、其方には三つ、俺は五つ。構へて敵を討てと言はれたれば子心で心得ましたと云うた。是非なき昔になつた「五郎」なんと云ふ十郎殿、三つの年に敵を討たうと云うた。然らば死ぬまい。出家にもなるまい。三つ子の魂百までぢや。出家にならねばこなたの勘當。又死ぬれば十郎が勘當面倒」とて怒る。十郎「おのれ出家になるまいとは」「いやだ十郎殿」とて手を捉へて働かせず。十郎「汝あまりぢやが。兄に手向ひをする」「なんの兄。五郎身は金だ、親も北條も兄も太郎もいらぬ」とて兄弟挑み争ふ。北條殿御覽じもし母人何を争ふも、勘當を赦されたさのまゝ。勘當を、お赦し」と云ふ所へ鎌倉よりの討手とて、秩父の六郎本田の二郎馳向ふ「北條館には、曾我一家をかくまひ給ふ由、討つてなりとも出せ」と云ふ。小四郎立出で、推參とて戦ふ。十郎是迄と

戦へども敵はず。母「あぶない團三郎鬼王は居ぬか」北條「はて五郎が居たらばよい」と云ふ。五郎「かゝ様行かうと云やれ。助太刀」と云ひ働く。十郎「汝は勘當の身ぢや。叶はぬ」と云ふ。五郎引く。又戦へど十郎敵はず。母「五郎かゝれ」と云ふ。五郎働く。十郎「勘當ぢやによつてかなはぬ」五郎引く。母「如何にしても十郎があぶない。勘當ゆるした。働け」と云ふ。片端取つて押ゆる。母「やれ十郎危ない」十郎「目出度し鬼王盃」と云ふ。母何事ぢや「はて五郎が勘當赦されませうため、斯様に致しました」母「いよく勘當は赦した」秩父本田起上り「實御覽なされませい。木太刀でござります」いよく目出度しく千秋樂の舞ぞめでたき。

根元曾我

第四番目

爰に二の宮の姉は兄十郎深く大磯へ通ひ給ふ故、意見の爲に急がれけり。此處荻野澤之丞出て申さぬ苦に候やう／＼急ぎける程に、大磯に着きにけり。爰に和田の一門九十三騎の人々は、山下は宿河原長者が許の酒宴は面白うこそ聞えけり。長者も豫て期したる事なれば、酒君の十八人ぞ出しけり。此内九十



侍悦びの こと有り。されども和田の心ざす虎は座敷になかりけり。義盛虎を出せと云ふ。虎は泣くく出でにけり。禿二人打連れて母の仰の重ければ座敷には出でたれども、既に立たんとしたりけり。和田「十郎が居られぬによつて不機嫌な。それく十郎」とありければ、大幕つかんで出でられけり。村千鳥の素袍に九寸五分小裁刀にさも悠々と出でられけり。某も宇佐美の主和田に何しに劣らんと右の座敷に直らる、此内思ひざし有わ和田悦びながら腹立にて「とかく打戯れて飲むべし」と云ふ所へ「申し上げます。朝比奈の三郎殿只今島臺をからくみ、是へ參られ候」十郎「朝比奈はいらぬ物」和田「朝比奈なりとも呼出せ」とて朝比奈を呼出す。朝比奈來り十郎に思ひざし「面倒成る娑婆世界」とてあがれば、十郎いやがりけり。「とかく打交り終日飲むべし。朝比奈一曲仕つれ」畏つて舞ふは、今奏づる歌舞の曲、舞も既に過ぎ時分に障子の一間踏破り、曾我の五郎現れけり。朝比奈「これへく」と雙六盤にて招きけり。五郎も側なる碁盤の上に打乗り、四邊を睨んで立ちにけり。此内草摺曳淨瑠璃つひに草摺引き切り、笑ひてそこへ退きにけり。所へ御所の五郎丸醫王祇王「君富士野へ御立ち候間 早々御出」とて鎌倉さして歸りけり。眞に武士の鑒なり、天下太平治まりけり。

右此本は中村座子供立役はやし方不殘口上所作諸藝四番續狂言の次第書きしるし一字一點あやまりなく寫之令板行者也

狂言作者

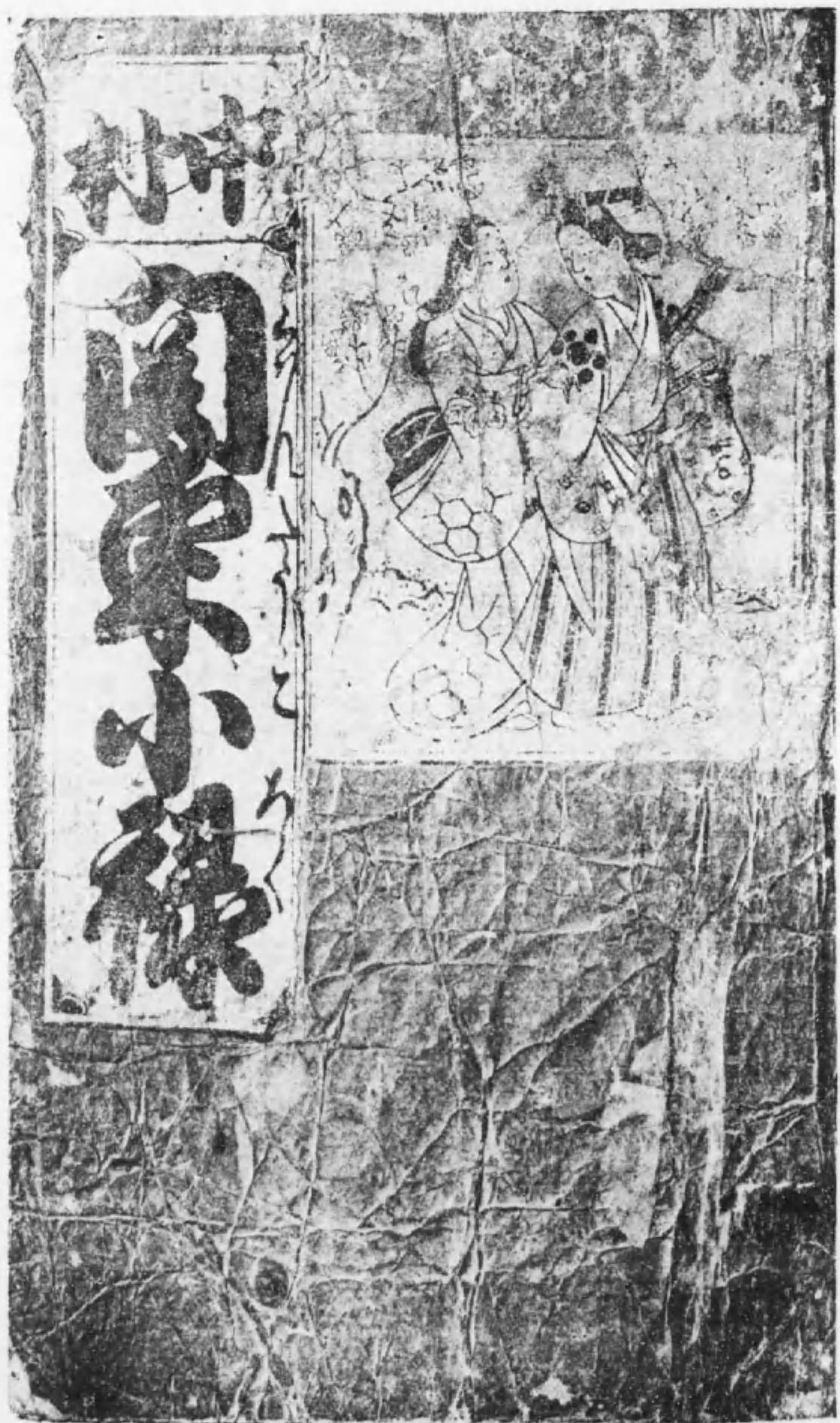
中村明石清三郎

市河團十郎

堺町東横町

かいふや開板

元祿十年丑ノ五月吉日



— 解 說 —

元祿十一年三月中村座上場。作者不明。此劇は丹波與作と同じやうに、俗諺で名高かつた關東小六を主人公としたものである。關東小六は慶長の頃江戸赤坂に住んで居た馬方であつた。小歌の名人で、氷川明神の信者であつたといふ。此の小六の事を諺つた小六節といふ俗諺があつて、慶長年間と寛文の中頃と、貞享年間と、大凡三十年目毎に三回繰返して流行したといふ（貞享四年刊、故郷歸江戸帖 赤坂氷川明神竝小六の條）而して其歌詞は絲竹初心集（寛文四年刊）の中卷にある「小六ついたる竹の杖……」と同書下卷の「小六生れは西の國……」が元唄で、松の葉（元祿十六年刊）第四卷の小六節は此改作である。

巷説や俗諺で知られた關東小六を劇に脚色したものは、元祿十年に京都の早雲長太夫座で上演した「關東小六今様姿」と、この「關東小祿」とが最古のものらしい。前者は此傑作集の下卷に收めるから、詳しい事はその時に譲るが、此二篇の間には關係は無さうである。江戸役者の中村七三郎が上方で小六劇を演じたので、それに刺戟されて江戸でも興行したものと思はれる。此作は小六の巷説を元として、上方風のお家騷動物に脚色し、小六とその妻國姫、情人露の前との三角關係、露の前に戀慕して非業の死を遂げる僧、若君の身代りに我が子を殺す忠臣片岡彌五郎の苦衷などを取合せ、結局氷川明神の神助で、悪人が滅亡する處で終る。小六彌五郎主従が出家して修行する條は、外記節の地で演ぜられて居るが、後世の所作事物と稱するものも畢竟これに他ならぬのであつて、小六を粟島修行者とするのはこれに起るのである。江戸の半太夫節にも關東小六といふものはあるが、此作とは關係が無いやうである。

<p>三才</p> <p>五常街</p> <p>どらんのちりり 養六様 若丸 死出ぬ</p>	<p>三才</p> <p>五更天</p> <p>どらんのちりり 茶屋 おしめ</p>	<p>女想僧 主想士</p> <p>関東小祿</p> <p>どらんのちりり</p>
<p>四才</p> <p>五瀧恨</p> <p>どらんのちりり 月ひり 若丸</p>	<p>三才</p> <p>五瀧塵</p> <p>どらんのちりり 飛渡山 若丸</p>	

一腰	浦の翁	中村清九郎
一う	梅壽院	山川彦十郎
一鐵	巖寺	玉次郎三郎
一片	岡刑部左衛門	田村平八
一同	彌五郎	山中平九郎
一同	彌三郎	市川團十郎
一關	東小六	猿若山三郎
一弟	重王	村山四郎次
一岩	倉兵藏	中川半三郎
一弟	大八	杉山勘右衛門
一彌	五郎女房手	山川彦五郎
一露	の	荻野澤之丞
一存	行坊	澤村小傳次
一國	姫	山本源左衛門
一腰	元	桐山政之助
		小野川織江

一腰	元	岡田小才次
一同		中村やしほ
一同		上村萬三郎
一局		菊川平八
一生	胸三木之丞	中村今數馬
一奴	角藏	西國兵介
一札	の神主	瀧井源右衛門
一童子	ふし竹	岡田九郎左衛門
一若	君清若	猿若まし之介
一げ	んりやう	中村勘三郎
一小	姓	嵐門三郎
一同		袖崎村之助
一同		袖崎折之助
一同		桐山辰三郎
一同		桐山右源次
一下	人久六	秋田彦四郎

男想女想
女想男想
主想士

關東小祿

四番續

爰に一條尻橋供養の踊小供残らず金銀の采振り立て踊りたり。その供養の儀式終りたれば、家老岩倉兵藏、弟大八「千秋萬歳の御祝儀、萬年々々お目出たうござります」重王丸のたまふやう、「此度東方より小六御上りありし其御役儀として、一條尻橋の役を仰せ付けられた。しかし未だ小六には都の御知らせなし。さるによつて代官として弟重王橋奉行に立ち、橋成就したりけり。母上梅壽院悦び給ふ。また弟鐵巖寺は東より小六上られしにより、對面ながら、一つには橋參拜成就の爲四國より上り給ふ。又十二人の子供それ々の祝儀あり。豊浦の翁獻々の賜りて、既に儀式も過ぎ行けば、翁は十二人の子供を連れ、家路をさして歸りけり。折鐵巖寺「先づ以て重王久々の事、橋供養成就致し満足に思はれう。扱此上に方々に愚僧が望みがある。愚僧が草庵なか／＼荒れ果てたり。奉加帳を出し申さん。それ／＼點をかけ給へ」岩倉兄弟かしこまり帳を開き見て皆々一心と申



しけり。遙か末座に片岡刑部左衛門が忬彌三郎に廻りたり。彌三郎開き見て「扱々殊勝なる奉加帳、私はずき申し候奉加とて、柱一本馬一疋旗一本」とぞ申しける。鐵巖寺驚き、「是は一圓心得ず、仔細を申せ」とありければ「されば柱は礫木、旗一本は幡物さ。馬に打乗せ、國中を引渡さん。奉加に事寄せて廻文狀と打見えたり」というていろく諫言申しける鐵巖寺腹を立て「それ縛めよ」とありければ、畏つて縛めけり。重王丸見給ひて「先づお待ちなされませい。私よろしく申し合點させませう。若し合點致しませずば、幸ひ新刀を求めましたゆゑ、討つて棄てませう。先づ館へお歸りなされませい」とて皆々奥に入りけり。彌三郎重王を見て「畜生め」とぞ申しける。重王「誠は其方を助けたう思ひ、かくは計らうた」「扱は左様か有難し。追懸けて鐵巖寺を討取らん」と申しけり。重王「いや〜待てとよ。此段を小六様へ申すべし」尤とて打連れ小六方へと急ぎけり。互に心を合せけり。知契の約こそ尤なり。

爰に小六は馬上由々敷も立出でけり。頭は彌生の春なれや、清水近き地主の花、地主権現に着きにけり此内天王立藤摩外記淨瑠璃あり元より小六色男上下取つ捨刀、蝙蝠羽織着なしつゝ、小姓數多引具して、幕の内へぞ入りにけり。げに春めきて面白し。爰に又彌五郎が女房手枕茶屋の女に様を替へ、暫く眺め居たり

けり。此内淨瑠璃あり此内淨瑠璃かゝる所に向ふより片岡彌五郎宗清は浮世を忍ぶ深編笠、小草履取を打連れて、かしの茶屋にさしかかり此内淨瑠璃之丞團七ぬれあり所へ又向ふより、さも花やかなる若衆伴一人召しぐし來り、花に遊びし小鳥を取つて居たりけり。彌五郎見て、茶屋の女を頼みつゝ、取持ちくれよと申しけり。さら〜若衆合點せず、遁さぬと袴き、既に遺恨と見えし時、幕の内より小六「暫く〜預かつた」互に編笠取つて見れば、家老片岡彌五郎、茶屋女は彌五郎が女房、若衆と見えしは小六東にて馴れ染め給ひし露の前、人目いかゞと思召し、かく若衆の體となり、尋ね來り給ふ。是は〜と悦びけり。いよ〜露の前夫婦、都に母の定め置かれし國姫とてありけるが、それは儘よ別殿を建て時々通ふ夫婦とて悦び給ふ折からに、勅使とこそ申しけり。勅使と打連れ、鐵巖寺母人來り給ひ「勅使の趣別儀にあらず、久々東に小六塾居致しける所に、都へ上り役儀は勤めず、酒宴遊興にことよせ、花見の風情、傾城ばさらのみ好み、切腹」との繪言。小六是はとのたまふとき、彌五郎立出で「御待ちなされませい」と氣の毒がる。鐵巖寺、哀れみ御申し直し立て、切腹の訴訟ある。「勅使の上からは切腹は赦す、出家させよ」と有る。彌五郎又々罷出で、「腹さへ御申し直し候へば、出家の儀も御免なされ候へ」と訴訟する。「繪言は汗の如し、かなはぬ。歸らん」というて、「履物持てこい」といふ。彌



五郎「扱は賈勅使」と禁中の事を問ふ。更に知らず。誠は鐵巖寺が弟子存行坊「顯れしわ」とて、彌五郎腹を立て「さあば、様鐵巖寺の巧」とて、既に危き所に、彌五郎が親刑部左衛門三男彌三郎重王など伴ひ來り「此上ながら悪心の御止め」とて、色々申せば承引あつて、重王丸を不便に思召して、斯くは計らひ給ふ。「なにが扱總領なれば、小六に跡は相違ない」重王も道たる事を小六にいふ。互の心打ち解けて「扱暫くも母人様の願ひなれば、此所より乗替の馬に重王丸を馬上にて、皆々供をせん」とて、數人刑部先に立ち小六彌三郎が續きつゝ、臺笠は彌五郎夫婦、立傘は露の前、皆々行列々々、行列 踊の一踊、皆々由々敷引具して館々に歸られけり。誠に花の都にて、花見の會の大寄せ、目出たし〜君は千代ませ。

關東小祿 第二

爰に小六の御臺國姫は、小六露の前にあひ馴れ給へば、妬ましく思召し、腰元あまた竝に家老岩倉兵藏兄弟を召され、楊弓になぞらへて、露の前を調伏有り此内所作、政之介不思議や盆の後に隠し置きし人形より紅流れて見えにけり。國姫喜び「最早願ひ成就せり」と喜び「未だ腹は癒らざる」と

て又人形に取付き叫び給ふ物音に、次に控へし生駒三木の丞馳せ來り、人形奪ひ取り「是は御臺様何故かやうになされ候」と色と様子を見て「此頃内御部屋の有様心得ぬと存じしに、さては何者やらん調伏遊ばさるゝ。いかなる仔細」と申しけり。國姫腰元くま心得「いや〜楊弓稽古」とのたまふ。三木の丞楊弓の稽古は女中の身として、心許なし」といふ。「屹度推量致し候に、まさしく露のの前様を調伏と覺え候」國姫「成程露の前を調伏する」と二世七生迄も變るまいと思ふ小六様を寝とられた。いやでもおうでも思ひ草、恨のたけは露の前取殺さねばならぬ」と恨み給ふ。三木の丞様子を聞き「是はあさましい有様」とて此内諫言の國姫いよく腹立ち「どうでも取殺さねばならぬ」とて天に叫び、地に睨み、遂に空しくなり給ふ。三木の丞皆々肝を消し「此段を小六様へ申さん」とて大館へ急ぎけり。

爰に小六の下屋敷、露の前の庵には、下女腰元砧を打ち居たりけり。かゝる所に小六より使として、下人久六花を持ち、露の前の方へ使に來りけり。露の前立出で、「いかなる御使に參りました」とて此内彦四郎「扱々をかしい男ぢや。とても事の事にわれを小六様にして慰まん」とて、結構なる衣裳を着せ、小六にして見んとて、露の前「かはゆらしい男ぢや抱きつかん」といへば、「いや〜女に



抱きつけば聲が變る」とていやがるを、面白くとて抱きつきける所へ、小六小姓數多連れ來り「露の前は」と問ひ給ふ。露の前「いや〜此所へ來る者は覺えがない、何者ぢや」「小六」と答、給ふ。露の前「小六様はここに一人ござるが、外に小六様あるまい」とて戸を明けず。「然らば歸らん」とて、歸り給ふを、露の前「はあ、小六様は歸らしやつたか」とて、戸を明けて出づる。其内に小六内へ入り給ふ。露の前歸りて、小六を見付け、肝をつぶし給ふ。小六「外に小六があるといやるは誰ぢや」「いや〜下人久六でござります」「久六おのれは大勢の女共が中に居て何事をしやる」「私がいや〜といへば、女衆が抱き付きました、悲しい事は聲が變りませう」小六「あさまし下人だな。なぶつて遊ばうとて「やい阿呆、聲が變るは誠ぢや、何んぞいうて見よ」といへば高砂をうたふ。皆々笑ひ「いや〜是にござりましてはいか、此方へ」とて奥へ請じ、露の前と小六は連れて入り給ふ所に、空しくなり給ふ國姫の執心現れ、露の前を睨み立ち給ふ。露の前驚き、「何者」と咎むれば、國姫なり。「自らが殿をよく寝取る女め、取殺さねばおかぬ」とて瞋恚の焰やむ事なし。小六立ち出で見給ひ、肝を消し給ふ。「成程國姫尤ぢや。其方を捨てて外に心はなければども、露の前には子があり、それゆゑ通ふことぢや。色はない」國姫いよく腹を立て、「子がある

か」とていよく瞋恚をもやし、「小六様私は餘り此方様の事を思ひ空しくりました」露の前のいよ恐ろしく思ひ奥に入り給ふ。小六今は是迄と髻切り給ふ。此内のみそり久六色々歎き「此御事方方にお知らせ申さん」とて、彼處をさして急ぎけり。給ふ説經あり

いつしか廣き九重に、夕影涼し糺の宮、社僧の玄良は有明役にまはりけり。かゝる所に、露の前狂亂の體となり、笹の葉に四手切りかけ、小六が形見の一節切とり玉章を持ちながら、糺の宮に着き給ふ。此所にて薩摩外記露の前物玄良見て「不思議や見れば二八にて物に狂ひ給ふは痛はしや」と問ひながら「夫は誰ぞ」と音に聞きにし小六か。某小六に逢はせ申さん」とて繪馬にかけし小六が姿見する。露の前悦び、恨みかこち給ふ。玄良露の前をつくく見て、はや戀風が身にしみて耐らず、抱き付く。露の前うるさく思ひ突倒しけり。玄良腹立て、取つて押へ、既に危き時繪馬に掛けし小六姿を現はし、玄良を押退けけり。玄良今は口惜しく「死して思ひ知らせん」と彼處の石鉢に頭を打碎き死したりけり。露の前驚き給ふ。「小六様」といへば姿はなし。所へ神主右京來り「何ゆゑ御手洗が震動致す」とて來り、玄良が有様を見て「まさしく其女が所爲」とて、縛めけり。下手人といふ所へ、小六出家の姿となり來り給ふ。露の前見て「お前は今俗形にて、自らを助け給ふが、出家の有様心

許なし」小六「扱は此繪馬が一念入つて助け給ふ」といふ。右京「さあ様子が知れた」とていよく小六を逆さぬといふ。露の前「都へ歸り、國を治め給はれ」と申さる。右京見て「尤なり、一度出家したる小六なれば、なか／＼都へ歸られはせまい。さあるとあつて下手人にもとられまい。いかに露の前、小六此故ながら小六は出家させい。命を助けん」といふ。小六「然らば御志有難うござれば、私は出家致しませう。とてももの事に、こなたに願ひがござる。露の前が事はこなたに預け置きます。都に若や母がござる。頼みます」とぞ申しけり。右京「然らばこなたにも私が甥が事でござれば、立良が菩提を弔うて下されう。露の前は預りました。館へ送り届け申すべし」露の前是非なく右京と打連れ、小六は出國し給ひけり。さらば／＼といふなみの、立歸る間も糺の宮、別れ別れになり給ふ。

關東小祿上卷終

關東小六 下の卷 第三

寂光の都喜見の樂みを謠ひ給へば、小姓共數多島臺を持ち出づる。鐵巖寺は還俗して、龍虎之介と申しけり。島臺を見て悦び「誠に某儀は梅壽院が弟として、小六は道心の身となり給へば、一子清若が後見の爲還俗致した」御前なる岩倉兄弟ふし竹皆々悦び給ひけり。所に片岡彌三郎來りけり。「今日の御祝儀お目出たうござります」と祝儀をいふ。龍虎之介「其方が兄彌五郎はなぜ參らぬ」「されば私兄彌五郎儀病氣故控へ申し候」「苦しからず、乗物になりとも乗り參るべし。預け置きたる清若を同道致すべし」「畏り候」とて、彌五郎はかしこをさして來りけり。龍虎之介「清若其方に家督を渡し候べし。何(本ノマ)彌五郎悦ぶべし」とて既に系圖を渡さんとする所へ、梅壽院來り「何龍虎之介なぜ大切な系圖を渡す。自らに斷りなしに渡す。此國はおれが國ぢや。おれ次第ぢやによつて、小六が弟 某が子重王に渡す。異議をいふ者があるか、清若を討つて出せ」といふ。彌五郎驚き「扱思ひもよらぬ御意かな。清若様に系圖をお譲りとあるより、御供致し參りましたる所に、かやうの次第は何事。どうでも清若様を渡す所でも、討つ所でもない」龍虎之介「あさましい事に

交り、よしない事を致した。彌五郎が前へも恥かしい」とて自害して死しにけり。梅壽院「扱もく一人の弟をあさましい事をした」とて歎く。彌五郎驚き歎く内に、龍虎之介起きあがり「誠はそら死だ。清若を奪ひ取らん事ばかり」とて、清若を奪ひ取る。彌五郎驚き「無念な、たばかられた」とて口惜しがる。「さあ清若を討つが、一味せぬか」とて詰めかけたり。彌五郎「成程討ちませう。私自宅で討ちませう」「いや、それはならぬ」「左様ならば檢使か」「それもならぬ。目の前で討て」といふ。「畏りました」とて乗りたる乗物の内に、情なくも若君の首を討ちけり。弟彌三郎無念がり、色々とはげめども彌五郎面倒なりとて、高手小手に縛めけり。龍虎之介いよく悦び、盃ををさ、んとしてさしけり。爰に鐵巖寺が以前の弟子存行坊、今は還俗して存左衛門と申しけり。御酒の相手に出いろくさし請けく飲む程に、遂に飲み臥しにけり。目出たしく謠ひけり。所に勝手にて、親は空にて血の涙と謠ひけり。龍虎之介不思議に思ひ、「何者ぞ」といへば、彌五郎が親刑部左衛門女房手枕なり。「何故是に參り、親は空にて血の涙と謠ひけるぞ」刑部左衛門縛られ居たる彌三郎が「事」といはんばかりの風情なり。是より平九郎澤之丞と善知鳥の謠ひいろく思ひあり龍虎之介見て「推參なり。かゝる目出たき折からに、かゝる風情は何事ぞ」彌五郎も酔醒めて臥しけるばかりなり。龍虎之介

「所詮な無い。刑部左衛門道を正す奴なれば、諫言と覺えたり。討つて棄てん」といふ。彌五郎目出度折柄、私計らひ申し宥め、親人にも一味させませう」龍虎之介「某は是より下屋敷へ參り、仕度して装束を更めん」とて彼處をさして急ぎけり。彌五郎後にて弟彌三郎が縛を解く。刑部左衛門腹立て「なぜ縛をほどかれた。やい彌五郎の畜生め。おのれを小六様には人と思召し、清若様を預け置かれしに、よくも討つて龍虎之介に一味致したな。侍に似合はぬ奴ぢやよな。大小を取れ」といふ。渡さず。刑部左衛門立ちかゝり、大小を取り「おのれ刑部左衛門が子といはれうか」とさんなく叱る。此内いろく思ひ「やい彌三郎兄の彌五郎を踏め」といふ。辭退したる風情、親の御意なれば、是非なく兄を踏みにけり「なによめ、其方もあの様な人でなしと夫婦にはせぬ。おれが娘にして、其方の氣に入つた男を持たせう。さあ男と別れたといふかねをはれ」是非なくかねをはる。手枕「さりととはく情ない人ぢや」とていろく歎く。此内澤之丞意見「子よりも大切に育てた清若様をよくも討ちたした」とて歎く。彌五郎今は詮方なく「不詮な事を致した。なに市若かはゆい事をした」と歎く。刑部左衛門此奴は氣が違ふたか」とていふ。彌五郎彼處の乗物の内より、清若君を出す。人々驚きた「蟲喰」もしいひ譯ではないが、お聞きなされませい。今日龍虎之介祝儀によつて、系圖



を渡さんとして清若様を同道致すべしいふ。合點參らぬと存じ、同じ乗物に清若様忰市若を入れ参り、道すがら若し清若を討てとならば、其方御身替りに立てと申しければ、道彌五郎が忰にて合點致し、祖父様や女房たちが事をいうてかひなく敷も先途に立ち、敵に取りまかれ、危き時に身替りに討つて捨てた。妻い(木ノマ)彌三郎殿、如何に親人の御意ちやというてよくも足蹴に致したな。つらいぞや女房、親人の外の男を持たせんとあれば心得ましたとはよういうた」と此内團十郎いろく 歌きのせりふあり其内に刑部左衛門は恥かしがり、彼處の乗物の内に入り、女房弟彌三郎さまなく機嫌とる。彌五郎「某は親もない。子もなし。女房もない獨り身ぢや」とて合點せず。若殿氣の毒がり、「親父に詫して貰へ」とあり。手枕彌三郎「親父様は時に恥かしう思召し、乗物の中に隠れてござるか」とて戸を開き見れば、太刀を銜へ自害して居たりけり。「やれ果て給ふ」といへば、彌五郎「もし私は腹を立てはしませぬ」というて歎く。此内いろい る愁歎あり扱死骸を野邊へ送らんとて、女房彌五郎乗物を昇れば、彌五郎は腰抜けたり。彌三郎「此方腰が立たぬ。罰ぢや。親人の勘當をうけ給ふ故、腰が立たぬ。某昇かん」とて昇き行かんとすれば、彌五郎「あさましや、一人の忰に別れ、親人に別れ、せめて勘當を赦すと有ることとはなし、是迄」と誓切り「祈る菩提身の爲にあらず。父上菩提の爲、清若様を頼む、

小六様出國こそ幸ひ、巡り合ひともく後世を祈らん」とて、袖の涙を打拂ひ、廻國行脚に出でにけり。あはれなりける物語り。

第四

小原木召されよ黒木召されよ黒木賣いつしか露の前は敵を討たん手段に姿をやつし給へば、下人久六も姿を替へ、黒木をこそは商ひけり此内彦四郎畫飯をつひひ申飯を咽に詰まらかしけり。所へ敵龍虎之介岩倉兄弟ふし竹皆々大勢にて來り「よき連の有り、馬に乗る迄は牛に乗り申さん」とて牛に乗りけり。久六見て腹を立て、牛より引きおろしけり。敵見て「何者なれば、逆さじ」とて既に事に及びけり。敵露の前を早くも見付け「うれしや討ち取らん」とて取り巻きけり。此内彦四郎つひしあひあり遂に敵を討ち散らし、車に細引を付け、帆をあげて敵に引かせて出でけり。才智の程こそをかしけれ。さればにや小六彌五郎は主従共に剃髪の身となり、重王彌三郎御供にて、佛歎の頌を誦し、東をさして下りけり。此内薩摩ところ 外記語り所へ七旬許りの翁來り給うて「今日はさる者の忌日に當り候へば、回向をうけたく候」と申しけり。「して又亡者の戒名は」と問ふ。「いやくその名は様子候へば名告るべき





にあらず」とて一木の松の賤が家へ人々を伴はひけり。庵を見れば、一壁に大長刀金棒大鉞兵具
 數多かけ置いたりしはいかにと問ふ。「某昔は武士の浪々の身となつて此山住に居候。併し年は
 寄つたれども、山賊夜盗を切り從へて、手に立つ者候はず」と物語りする。其内に形の消えて、草
 屋に一木の松の残りけり。小六道心皆々「扱は在所一木の松といはれしが、若し熊坂が亡魂か」と
 驚く所に、案に違はず、熊坂が執心現れけり。重王吉宗打つてかゝる。怨靈二人を事ともせず追つ
 捲つつ戦ひけるが、ありし姿を引替へ、糺の宮玄良と現れけり。其時行心坊是を見て、打物業にて叶
 ふまじ、いで一祈と祈りけり。怨靈今はたまりかね、形も消えて失せにけり。行心が法力を譽めぬ
 者こそなかりけり。是迄薩摩外記淨瑠璃 正本に御座候 かゝる所に清若を守護し、三木の丞右京「狼藉者にあひ候 助け給
 へ」といふを見れば、小六家老彌五郎。是はくとはかりなり。扱鐵巖寺が悪心故皆々剃髮の身と
 なつて不思議に廻りあひ給ふ。さて是へ
 虫 喰
 れ出で、「誠は我小六が氏神氷川明神なり」とのたまひ「われ露の前に心をかけ、小六があ
 虫 喰
 引入れん爲、いで本身の現し、雜人輩を退治せん」と甘尋の大蛇となり、悪人を滅し、神體氷川の
 明神と拜まれ給ふぞありがたし。佛法繁昌めでたし。

元祿十一年戊寅三月上旬

堺町 かいふや 刊行

雲の 絶間
名残 月

源平 雷傳記

— 解 說 —

此作は「金之揮」によれば元祿十一年の九月九日から中村座で興行したのであるが、此書が八月吉日附の刊行であるのを見ると、開場に先立つて出版されたものかと思はれる。

元祖市河團十郎の作で、頼光四天王の世界に「鳴神」を作り込んだものである。「鳴神」の劇としては、是より十五年前貞享元年中村座で「門松四天王」の外題の下に、團十郎が鳴神上人を勤めて居るこれが最初で、矢張り團十郎の自作であると傳へられて居る。けれども傳はらないので、現存の作としては是が最も古い。此の作では第二番目に團十郎の鳴神上人が澤之丞の雲の絶間の容色に迷つて墮落する條が全篇の山であり、尙第一番目に謡曲の「車僧」の趣向を加へてある事、第三番目に「卒塔婆曳」の荒事を仕組んである事、及び第四段の切に當時女形として名聲の高かつた萩野澤之丞の一世一代の名残の丹前姿及び座中總出の大踊のある事等は何れも注目すべきである。外題の角書に「雲絶間名残月」とあるのも絶間に扮する澤之丞の、一世一代を利かせたのである。總じてよく整つた作で、元祿時代に於ける歌舞伎劇の代表作といつてよい。

尙本書の形式上注意すべき點は、前掲の二篇のやうに上下二卷に分れて居ない事で、これより後に出るものは皆此書の體制に従つて居る。次に挿繪に於て見通し兩面の畫面を通して雲形を置いて上下二段に分けてある事も江戸の繪入狂言本に於て源氏雲形で畫面に上下の區劃をつける始であるらしい。

萩野澤之丞の一世一代

雲絶間 名残月

車僧 惠禪法

三才 蛙息 虹の火燭

二才 股白雪 天女

四才 帽の此系

上海の芝居屋の秘録 羊同作

四番つゞき役人之次第

- 一源の頼光 杉山彌惣左衛門
- 一同 頼信 中村 數馬
- 一妹 直姫 市川はつせ
- 一坂田の公時 山中平九郎
- 一孫坂田の公宗 猿若まし之介
- 一卜部 季宗 瀧井源右衛門
- 一子 季兼 かさ切順之介
- 一碓氷の定景 中村清五郎
- 一子 定春 市川せんや
- 一藤原の仲光 あぶらかん六
- 一平の鬼澄 田村平八
- 一源の頼近 猿若山三郎
- 一渡邊の竹綱 村山四郎次
- 一女房雲の絶間 荻野澤之丞
- 一妹 曙 をの川おりへ

作者 市河團十郎

- 一渡邊の國綱 市川九藏
- 一うすぎぬ 桐山政之介
- 一神主 國平 松本源左衛門
- 一八重垣姫 澤村小傳次
- 一弟 齋丸 袖崎村之介
- 一鳴神上人 市川團十郎
- 一櫻山たんや 嵐門三郎
- 一藤きやうち坊 秋田彦四郎
- 一ざんむ坊 山川彦五郎
- 一ざんせつ坊 をかだ九郎左衛門
- 一うんらい坊 中村清九郎
- 一てんりう坊 杉山勘右衛門
- 一小野のみちかぜ 中川半三郎
- 一ひとり武者 中村勘三郎

雲絶間月源平雷傳記

第一

爰に源の頼光は、田の面の壽とて、頼信公の館に入り給ふ。御前の人々には、季宗定景、君をもてなし奉る。頼信のたまふ様「さて四天王の者ども君に御願の旨候。如何仕り申さん」とあれば「とくとく」とありければ、頼信のたまふやう「されば四天王の者ども悴を持ち申し候。今日壽の折柄なり。あはれ御召あつて、それ／＼に御名を賜はれかし」とある。「なる程めでたき折柄なれば、名を付けてえさすべし」「それ御召」と有りければ、貞景心得「さき立つて公時次の殿に召具し候」とて、子四天それ／＼の名を名告りてこそ出でにけり。頼光御覽じ「なに公時、四天王が悴どもか。誠に子四天王ともいひつべし。先なるが貞景が悴。今日より貞若を引きかへ、碓氷の貞春」と下さる。」「さて次なるは」「されば季宗が悴季若」「今日より季兼」と下さる。有りがたしとて列座なす。扱三番目は悪太郎公時が悴公宗と下さる。さて渡邊が一子は國綱と下さる。それ／＼こ引

出物を賜はり、めい／＼に壽のせりふ有り。公時を始め、みな／＼君萬年と祝ひける。

かゝる所に渡邊下向と有る。渡邊出る。公時見て「渡邊貴殿は、君の御代参として、熊野に参詣めさるゝ段思ひの外早し。さて渡邊悦びめされい。今日壽の儀式有りて、貴殿の悴三田若にも今日より渡邊の國綱と賜はる」綱悦は限りなし。「扱参詣の折柄君の御身に一大事が出来仕り候。人々驚き如何なる仔細」と有る。渡邊「さればかやうの物を拾ひ取り候」貞景立ちより見れば繪姿に釘を打ち、鎮守府の將軍源の頼光と御名を書き、裏には南無日本第一大龍權現と有り、願主源の頼近。貞景讀みかねける。公時とむる。渡邊讀ませ給へと有り互の論やます。君御覽じ「貞光願主は誰ぞ」「源の頼」といふ。頼信「某か」「いや頼近」といふ。公時腹を立て、「是はまさしく頼近の調伏。併し主従の好み、かく申す公時育て申す頼近なれば、綱少しは容赦致せ」と有る。渡邊聞き、「されば頼近公ばかりなれば苦しからず。其手を見よ。まさしく三田の源太が手跡なり。某爲に弟なり。捨置いては後日の難儀と存じ、持参致したり」公時「しからは會得致したり。貞光」さて頼近の討手には、誰を遣はし候はん」頼光「誰彼と申さんより、四天王發向致すべし」公時「いや、某一人ならば参るべし」とて腹立て、渡邊「しからは公時一人参るべし。併し身が悴竹綱は未だ

熊野へ参詣せず、此度の討手ながら、貴殿召連れられ候へ」といふ。「伴れ参らん」といふ。國綱悦び「公宗殿私に討手に行く」といへば、公宗「父様某も参らん」といふ。公時「面倒な、伴れ行かん」といふ。季若貞若「某も参るべし」貞光「由ない儀により、身が悴季若も参りたきよし申す。いかい申さん」渡邊宥めけり。「しからは腹切らん」といふ。「しからは子供四人ながら伴れ行かん」といふ。みな／＼悦び、「公時殿悴を頼む」といふ。「心得たり」といふ。頼光喜び「早下向致し、頼近を討取るべし」とて皆々退出なしにけり。

されば爰に平井の保昌は供あまた召具し、住吉に参りけり。神主國平立出でけり。保昌いろ／＼神主に恨をいふ。「聞えぬ。頼みおきし事は如何致したるぞ。今日道風殿のこれへ参詣めさるゝ。今日是非取持ち兄弟契約の盃を致すやうにせよ」「承り候」とて保昌を奥に入る。「さて今日は小野の道風これへ勅使に御立有り。すなはち案内には渡邊が御供とて、古硯の名石を取出し置く所へ、住吉踊来る。國平も浮氣者踊にうつり、道化有り。よく／＼見れば女なり。「さて住吉踊と思ひしに、女なり。如何なる仔細」局立ちより「いや／＼別の仔細に候はず。誠は頼光様の御息女直姫様なり」といふ。國平驚き「其直姫様が如何やうの仔細にて御出で候ぞ」いや



る、道風様に惚れての事。國平そなたを頼む」と有りければ、心得たりとて人々を隠しおき、所へ道風は渡邊が案内にて古硯の名石を申し下し賜はんとて住吉に参らる。渡邊が附添ひあれば、なりがたしとて、神主が計ひにて、渡邊をまきにけり。姫時分なよしとて色々どき給ふ所へ、保昌來り色々當言をいふ。道風「念者を持つ事はならぬ」といふ。姫君「保昌が戀も妾が戀もかなへてたべ」といふ。道風承引有り、盃を取出し「さて起請を書かん」とて、保昌名石を取出し書かんとする時、直姫かの石を取りにげんとするを渡邊止め「此石を盗み行くは正しく變化の所爲ならん」というて名石を止むる。直姫「扱は現はれしか。誠は酒呑童子が精魂なり。此名石を奪ひとらん爲來りたり」といふを、渡邊飛びかゝり、片腕を打落し跡を慕うて急ぎけり。さればにや貞景は直姫館を出で給へば、心許なく思ひ、迎の爲乗物をつらせ來りけり。所に女「もし頼みましたうござる。妾は手を負ひました」といふ。助け給へといふを見れば、直姫なり。「扱は姫様今日の御供は何者が致しました」「いや渡邊が自らに惚れたというて、其戀がかなはぬとて此如くに腕を切つた」「扱は左様か。渡邊を討取らん」といふ。直姫「いや、是へ渡邊がくる」といふ。貞景先づ姫君を乗物の内に隠しけり。所へ渡邊來り「貞景此所へ化したるものをつけこんだ。いやさ、魔が入つた」貞景

「扱は魔が入つたか」とて飛びかゝり打つ。太刀を互に勵み「主に戀慕し、其戀がかなはぬとて、よく片腕を切つたな」渡邊「いやさ貞景、それは人でない」貞景「人でないさ」とて互に争ふ。其所へ保昌眞の直姫を手ごめにし來りけり。國平は道風を守護し、互に争ふ。「爰にも直姫様が有る」とて不思議晴れず。乗物の内を見れば、何もなし。扱は保昌が御供申せしこそ眞の直姫とて悦ぶ。「扱方々先立て公時は頼近の討手に参つた。しかし子供大勢遣し心許ない。三人打伴れて参るべし」とて國平に姫を預け、二人打伴れ熊野路さして急ぎけり。

浮世をば何とか廻る車僧、頼近は禪門の體となり、廻國僧と成り給ふ所へ、貞景が妹は漁夫の様に形をかへ、頼近を諫の申さんとて來りけり。陶朱公が昔を思ひ、一つの魚を捧げけり。此内藤外記淨瑠璃政之介仕候

頼近は「扱は貞景妹薄衣か、汝かねなく不便の加へし故、某を踏付けての諫言」「なか、左様でなし」「逆心の心はなし」薄衣「左様でなし、是御覽ぜよ」とて張りたる幕を引切り見れば、父頼光を調伏の壇上。「扱は現はれし」と既に危く見えにけり。公時子四天王を伴ひ、此體を見て、中に入り、女を見れば貞景が妹なり。公時頼近に向ひ色々諫言有り。既に頼近を捕つて押へければ、郎黨ども子四天王を奪ひ「頼近を殺したらば、子供を殺す」といふ。さすがの公時我子ばかりなら

す、大勢の子供を殺しては、預りし前が立たぬとて、爲ん方つきたる所へ、貞景平井渡邊來り「必ず卒爾を致すな公時、渡邊が子供をよこしたるは、斯様の儀貴殿の逸り過させまじき爲。扱方々、頼近公御發起あらば、助くべし。必ず悴と朝敵とは見替は致さぬ」頼近聞き給ひ「方々の志切なれば、成程、發起致すべし」四天王悦び頼近の命を助け、子供を奪ひ取り、扱禮參に熊野へ、頼近公を先達にて「熊野へ參詣々々」と皆々打伴れ三熊野さしてぞ急ぎけり。

第二

されば朝廷には公卿數多參内有り。禁廷伺候の武士には平の鬼澄、唯一の神道をもつて住吉の社家津守の國平をもつて神道加持有りけれども、其かひ更になかりけり。其時頼信重ねて奏聞有りけるは「とかく神道の威力未だ威徳も見えず。某存じ當り申し候。七大寺の住僧懷山和尚を御召あつて、一加持御祈り候へ」と有りければ、鬼澄承り、やがて使を立てにけり。懷山香衣を着しつゝ、やがて禁裡に出で給ふ。攝政御覽じ、「いかに懷山、はやく雷を鎮められよ」「承り候」とて、壇上さして番祈有り。此内雷問答。淨瑠璃あり。國平も雷電に怖ぢ大床さして逃げ行きけり。鬼澄蝦目を引きければと

も、今はたまらず「何様これは大江山酒呑童子の精魂ならん」と顛ひわな々き御簾近くぞ逃げにけり。其の後雷電鎮りけり。帝叡感淺からず、すなはち鳴神上人と賜はりけり。上人悦喜淺からず、會稽の譽を得、傍に入り給ふ。

かゝる所に碓氷の貞景頼近を生捕り、禁裡に相詰む。「扱いかなれば頼近を早速縛め參つたるぞ」「されば、頼近出國の身と成り給へど、逆意の心止むことなく、あまつさへ此度は、西國に落行き、大物の城に取籠り、都勢を待ち給ふ。早速發向致し、是まで參内仕り候」頼近「朝敵にはあらず。某總領たる身なりしに、あれなる頼信に武將をつかはす口惜しさに、扱こそ叛逆の思ひ立あり。かく繩目に及び申し候」と陳じ給へど、既に罪刑極まり、六條河原に引出し、引立てんとしたりし時、鳴神上人出で給ひて、「先づ待て」とて止め、「何怪王丸、そちは若年にて禪門の身となり、某が弟子となりしに、かく縛めに及びしよな。某命にかけて命乞致さん」と御簾間近くつと出で、命乞有り君承引ましまさず。鳴神「最早かなはぬ頼近よ、併し申し請けたりし上人號返進申し候。某是より龍神が窟に籠り、南海下界の龍神を封じ、干魃天下に極めん」と怒をなして、上人は龍神が窟に籠らるゝ。



爰に鳴神上人の弟子同宿一人つれ來り「聞いたか、此度上人様には頼近の命乞ひ給へども、其事かなはぬ故、此窟に取籠り、龍神の封じ給ふ故、此如く干魘する。てんと最早何處も彼處も照割る、」所へ上人出端あり「いよく今日より坐禪觀法に入る間必ず物をいふな」といふ。窟の内に入り給ふ所へ、雲の絶間と打見えて、手に觸れ持ちし薄衣物洗はん白瀧の流れの末に立寄りて脛の白きを人や見ん。これ誠に古への久米の仙人の昔かと思ふばかりに同宿彼の絶間を打眺め物いひたがる風情なり。上人思はず打眺め、絶間が妙なる容色に見とれ給ひて、窟よりはつしと下座に落ち給ふ。同宿立寄り、「上人様いかに」とこたへけり。上人面目なく、顔打赤め立ち給ふ。絶間立寄り上人にさまぐいたはり奉る。上人心を移されて、扱もやさしき上臈と思ふ心に迷ひつゝ、「人の心の花の色志の嬉しさに、寄添ひ語り申さんと、同宿を目くばせして立て給ふ此内彦四郎後にて上人「なに上臈、國は何處の人」「私は後家でござります。いとしいと思ふ夫に別れました」「扱はさやうか、いたはしや」といふ内にも、絶間を見て、亂心となり給ふ。絶間「はて此方様はよう似ました」「誰に」「はて、死なれました夫によく此方様が似ました」と戯れの餘り夫婦の契約なして「今よりして此方様を還俗させて、立派な殿様にして大小をさゝせて、夫婦になりませう」と盃

して打亂れ、互ひに引請け、飲み、上人酔ひ亂れ「おれは名僧であつた。あれを見たか。あれは龍神が窟ちや、頼近が命を乞請けた。それがかなはぬによつて、其返禮に龍神を封じて、窟へ龍神を封じて置いた。仰に酔つた」とて、彼處にかつばと臥し給ふ。絶間時分な今ぞとて「いかに上人まことは我渡邊が妻絶間なり。御身かく龍神の封じ給ふゆるゑ、御身落さんと思ひ、宣旨によつて來りたり」とて、龍神が窟に入り四方の七五三繩切つて放して、下山して乗物に打乗り、都をさして急ぎけり。一薦同宿立出で「扱々大きな雨かな。上人様」と起しけり。上人「水が飲みたい。絶間々々」といふ。一薦同宿「もし今の女は偽り者でござります。誠はお前を落しに參りました。麓より乗物に乗り參りました。渡邊が妻ちやげにござります。龍神が窟の七五三を切りました」と見れば七五三が切つて、青龍はなかりけり。上人大きに怒り給ひ「扱は君よりの謀によつて參つた。無念なり」と彼處に立ちし不動の臺搔掴み、岩石古木を引倒し、顔色變つて怒らるゝ。同宿驚き止むれば、取ては投げ、搔掴み、勢ひかゝる有様は凄じかりける次第なり。荒人神か、鳴神かと、みなく恐れて見えにけり。

第三

爰に鳴神上人は、雲の絶間に落され、今はせんかたあらずして、萬事の床に臥し給ふ。一臈を始め同宿達いろく看病なされけり。併し今は夜詰も重なり、慰みの爲に同宿達基を打つて慰さみけり。互に言葉を争ひ「もはや此石は死んだ。いや息が絶えた」といふ。兒立寄り「いかに方々只今上人様は休み給ふが、今は石が死んだ、息が絶たりとは、餘りといへば差合なる詞、平に止まり、お薬を進ぜられ候へ」とある。皆々げにもと思ひ、看病つくしてゐたりけり。所へ女の薦僧今一人は若衆にて、道行にて出でにけり。此内小傳次急ぐに程なく、尼が崎に着きにけり。さて若衆申すやう、「先づもつてお前の事は大和におきまして、本荻長者の獨姫八重垣様と申しまして、御秘藏の姫。私が弟いつき。さてこな様には許嫁の殿様がござりますと仰しやりました。聞きますれば其殿様は出家の望有るとあり、出家遊ばされました。それゆゑお前にも未來が大事ぢやとあり出家なされました。私は出家やら何やら斯様に御供致します。もはや心にかゝります事もござりませぬ」とて互に來し方行末を思ひ、宿を借らんと見れば火が見えます。あれは摩耶山でござります。宿を借

りましたらば、ようござりませう」とやうく家路に見つけたり。軒に立寄り様子を見れば、鳴神上人目をさまし「なに一臈同宿ども水が飲みたい。定めし永々の病氣に、もはや精氣もつきつらん」と立寄り水を飲まんとて、忽ち蛙の形と成る。人々は人かと思ひ「宿を貸し給へ」といふ。「宿を貸すべし」とて見れば大きな蛙なり。齋「斯様の時の御供なり。いかで遁さん」とて打つてかゝる。同宿驚き立出で「やれ狼藉者」と人々を取巻き、「汝等は盗人ならん」「いやく左様の者でなし。我は宿借りに参つたれば、宿を貸さんとする。見れば怪しき者ぢや」「なる程宿かりぢや」とて見れば、上人蛙と成り給ふ。人々怪み、上人様と呼びにけり。上人息つき「我れこそ上人ぢや」「成程宿を貸した」「扱は形が蛙になつたか。なに口惜しや。扱方々は何人ぢや」「吾々は太和に於きまして本荻長者に姫八重垣」「扱は八重垣か。我こそ幼き時夫婦の語らひなしたる身なりしが、出家の望有るゆる、夫婦にならなんだ。今こそ鳴神上人ぢや」「扱は上人様か。何故かやうに煩ひ給ふぞ」「されば恥かしながら、最初あさましい形になりしは様子がある。某仔細あつて、龍神が窟にこもりしに、雲の絶間に落された。恥かしや」とて泣き給ふ。八重垣聞き「さては雲の絶間に落され給ふか。自らと夫婦になることはいやと有り出家し給ふ身が、雲の絶間に落され給ふか。よくよ

く絶間が美しい者であらう。某取持申さん此内上人にとて行かんとし給ふを止めけり。其隙に上人は舌くひ切つて死し給ふ。人々驚き「扱は上人様は捨身なされ候」とて歎く。八重垣「扱は果て給ふか。いや〜いやでもおうでも絶間に申さん」とて、物狂はしく成り給ふ。「此文を持ち參らん」とて上人の書き給ふ文を見れば、書置の事と有り。「何々、八重垣其方の前に言譯なし。又畜類の形となる恥かしさに、捨身致し候」「扱は左様か」といよ〜、物狂はしく成り給ふ。同宿驚き止めければ、心亂れて行方知らず成り給ふ。一薦とかくの詮議はなし。上人様を弔ひ申さん。扱形が蛙の形と成り給ふ。蛙殿のお死なやつた。おんばく殿がお弔ひとて、歎きながら上人の死骸を取置きけるこそあはれなり。

爰に山崎の館には、雲の絶間氣色平癒にてめでたしとて皆々腰元寄合ひ島臺を捧げける所へ、渡邊の竹綱は絶間妹を伴ひ都よりはる〜来るに、絶間が氣色よくて嬉しい。「さて今宵は名残の月見ぢや」とて出入の座頭志賀市替女の信夫を呼びけり。志賀市替女と夫婦喧嘩をしいだし「もし渡邊様御覽なされませい。如何に不具同志が夫婦ぢやとて、無理ばかりいやる」とて互ひに論じけり。渡邊替女の信夫を見て、妹を頼みよき替女ぢやとて、さま〜口説く。此内いろ〜志賀市腹を立つ

のを面白がりけり。所へ絶間は來り「さて渡邊様最早私が氣色ようござります。私も名残の月を見ませう」とて、座頭を呼び肩を打たすれば「絶間様の肩を打ちますが嬉しい」といふ。信夫は渡邊が肩を山車舞にかゝり、渡邊を打ちたがるしこなし有り。所へ公時御入りと有り、替女も座頭も奥に入る。公時箱の内に大きな卒塔婆を入れ「なに渡邊そなたは雲の絶間が氣色見舞ひと有り。喜びしに、さはなくして酒宴遊興は何事ぞ。此卒塔婆は供養致せんが爲所持致したり。絶間そちは鳴神を落したぞよ。其罪を遁れうと思ふか。やれ鳴神はそちを思ひ死に死した」といふ。「成程卒塔婆の一本も供養致ませう」「お〜うれしい。然らば身は孫竹若に逢はん」とて、奥に入る。渡邊「舅公時が尤ぢや。しかし今宵限りの月見」と共々語り慰みける。時に島臺なる龜動き出でけり。渡邊首を打ちければ、心といふ文字になり薄の中に入ると見えしが、死して久しき鳴神現はれけり。方々に掲げし燈火一度にはつと消ゆる。二人驚き、「やれ火を出せ」と有りければ、公時驚き、竹若が手を引き出づる時に、竹若彼處にかつばと伏す。絶間竹綱驚き、「なにと竹若苦しきか」と問ふ。「いや、竹若ではない。鳴神だ。竹若が命を取る」公時腹立て、「鳴神が取りついて扱は我々に憂目を見するか」とて、駈出でんとするを止め「もし公時様其鳴神は死にました」公時は非なく歎



く。「なに鳴神、幼いに取付いて苦しみを見せんより、もし上人様あやまりました。此絶間に取付き給へ」と歎く。竹若聲をあげ「然らば絶間を去れ、離別してあるならば、立退かん」渡邊是非なく「いや〜竹若を殺さば殺せ、絶間は去らぬ」上人「然らば竹若を殺す」といふ。公時「爰は絶間會得して一度館を出でよ」と有り、是非なく、絶間出でにけり。此内澤之丞四郎次平九郎名殘絶間是非なく出の時、竹若續いて出る。公時見て「怨靈の精續いて出るはいかなる事ぞ」上人「いや、絶間を去るからは、上人が夫婦になる」公時今は耐えかね、側なる塔婆押取り互に竹若と引合ふ。此内藤摩外記淨瑠璃不思議や上人實の形を現はし、遂に卒塔婆を引つ切りけり。いよ〜怨靈怒をなし飛んでかゝるを打散らす。所へ替女と座頭出で上人の敵と打つてかゝるを、取つて押へ「何者なるぞ」某は幼き時許嫁したる八重垣、これなるは上人の弟子一朮なり」すでに事に及びしを、又ぞや上人の精魂現はれ「我まことは鳴神にあらず。もと別雷の神。濟度方便に現はれ鳴神といへるなり。又絶間は唐土養由が女なり。渡邊に弓流を授けん爲、假に絶間と現はれたり」と糺の森に隠れ入り給ふ。糺の森に形は見えずなりにけり。

第四

爰に源の頼光は都よりの宣旨により。小野の道風と直姫を婚姻の結び有るべしとて、館に迎ひ取り給ひ、其祝言の御能とて、棧敷を構へ、皆々興をなしにけり。さて其次の御能はなに、四天王の者共承り早々御能はじまりと有る所へ、侍一人参り「樂屋の内には狼藉者がござ候」「それ引出せ」畏つて承り引出し見れば女なり。貞景立寄り見てあれば、妹の薄衣なり。渡邊「立寄り見れば、貞景妹なるが、何故狼藉をなしたるぞ」「されば自ら儀は頼近公と夫婦の契約致し候へども、頼近道ならぬ御思ひ立ち候ひしを、度々諫め申せども、御承引なく、遂に路頭の露と失せ給ふ。自らも出國の身とならんと思ひ候へども餘りの事の悲しさに、頼近失せ給ふは、四天王の計ひと思ひ、兄貞景はいふに及ばず、四天王の面々一太刀づつ恨み申さん爲、かく参り申候。とく〜首を召され候へ」と辯舌清く申しけり。渡邊とかくの言葉なく、立寄り繩を解きにけり。貞景「何竹綱某が妹と思ひ、容赦召され候か」といふ。「いや〜左様でなし、餘りといへば神妙なる志。女心に一騎當千といはる、四天王を討たんとはしほらし、い。命は助け志あらう」といふ。薄衣「忝うご



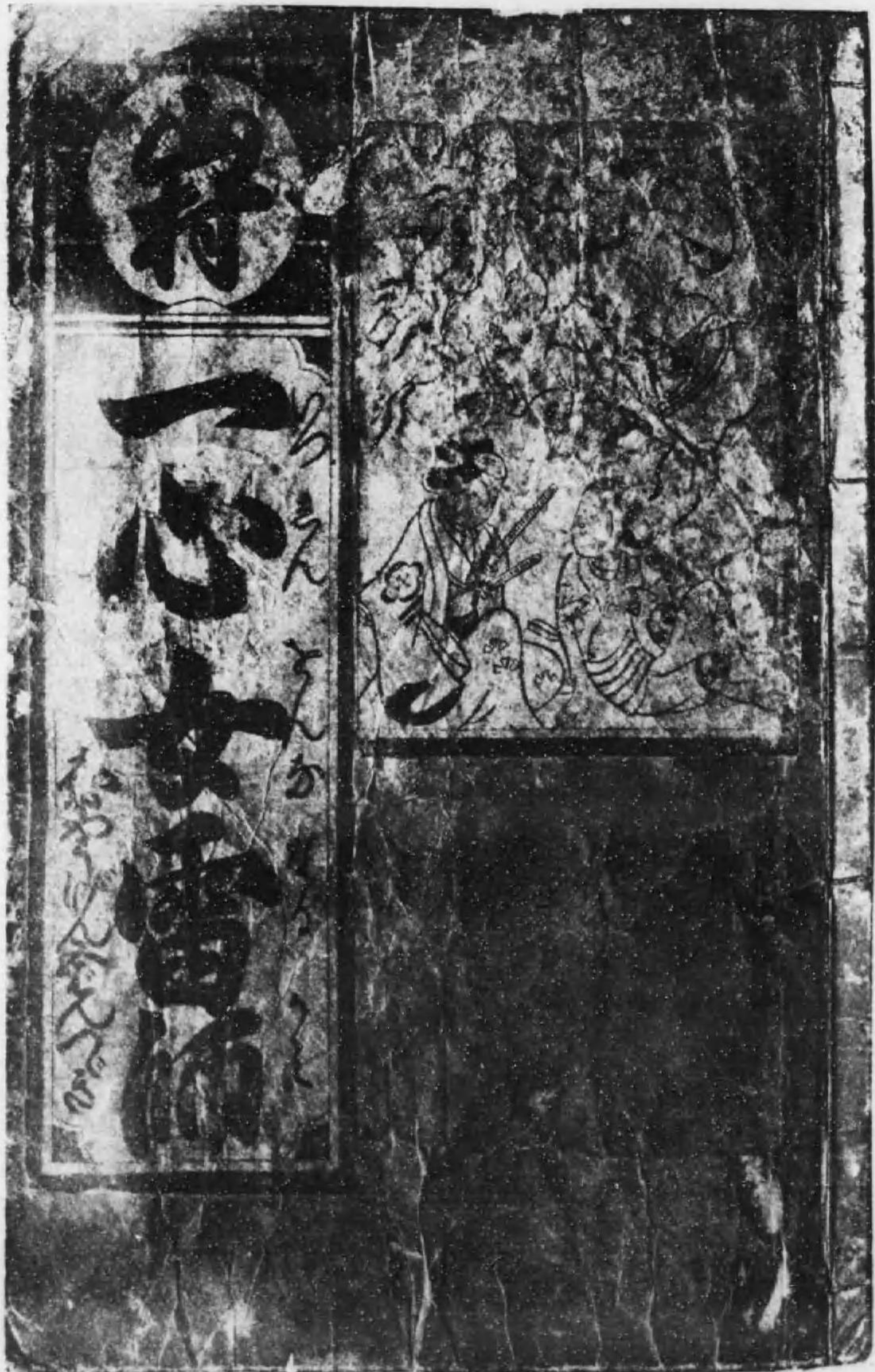
ざります」として髪を切る。頼光御覽じ「やさしき志、朝敵なれども頼近は一子なれば不便に思ふ。頼近が菩提を弔へ」とて、御所において三百貫賜はり、退出なして歸りけり。「扱此次の御能は何。とくく保昌御番組を語るべし」とて、保昌物語る。此内外記淨瑠璃勸三郎仕候物語過ぎて、天井より大なる足出る。保昌叱りければ、不思議や、魔障の形現はれ「實は頼近にあらず。我こそ伯耆の大山なり。頼近が皮肉に入り逆臣の徒黨となす。いで物見せん」とかゝりしを取つて押へ滅しけり。威勢の程こそゆゝしけれ。

此所にて團十「此度澤之丞元服を致します。もはや是が名残でござります」とて、役者不殘澤之丞を耶口上あり。勇め、もはや是へ澤之丞元服召され、立髪にて、六方振り出づる。此所澤之丞六方出端所作有り。名残姿も男山器量よし、又立髪も似合ひしとて、勇めながら又というては成りがたしと、勇めの爲、座中不殘大踊。子供は花を飾りければ、立役は萬石踊我れもくと俵踊江戸評判の名残姿、踊はなに、柳之介が俵踊萬石千石千秋樂めでたしく大踊。

元祿十一年寅八月吉日

堺町東横町

板元かいふや刊



— 解 說 —

元祿十二年六月山村座興行の五番續大狂言。江戸の五番續はこれが始めらしい。作者不明。元來「女鳴神」は元祿九年中村座で演じたのが初めて、外題は「子子子子子」といひ、役者は萩野澤之丞と袖岡政之助で大當りをとつた。此頃は「鳴神」ばかりで、團十郎は中村座に於て此前年に二度目の「鳴神」で成功してゐるので、山村座でも之に對して「女鳴神」を出したのもらしい。それ故此劇では第二番目の「女鳴神」の場が見せ場であつたに相違ないが、その外に「卒塔婆曳」もあり、熊野比丘尼の繪解きの場もあり、猫の所作もあり、三人片輪の關所破りの珍趣向もあり、碁盤人形の所作もあるといふ風に、色々の趣向を取入れて居る。さうして全篇を貫く基調は執拗なる戀愛に基づく葛藤であつて、大體上方式の作風に成るものである。

人物としては西國兵五郎の扮する底廣介太夫といふ道化役の最も活動して居るのが面白く、その他の主なる役は牛島新五郎の中辻大和之介、松本兵藏の絶間姫、中村傳九郎の破戒僧頼豪等である。

淨瑠璃太夫の虎屋喜元及び豊島源太夫は堺町に操座を持つてゐた虎屋永閑の門下で、中村座や森田座へ團十郎が出演する場合に薩摩掾外記が聘せられたのに對して、此の人たちが山村座へ出演したやうである。此時だけではなく、喜元は山村座へ引續いて出たと見えて、本年九月「五頭大伴魔取」興行の時、出て語つた淨瑠璃の正本などは立派な繪入本となつて出版されてゐる。恐らくは各興行毎に語つた淨瑠璃の主なものも、後世の河東節や豊後節の繪表紙薄本のやうに、其都度出版されたものであらう。本書の挿畫は作の内容と合致させるためか豪壯な風はなく、大分柔かみが勝つて居て、却つて上方の狂言本に似て居る、矢張り鳥居派の筆であらうが。

淨瑠璃太夫 虎屋喜元

一たゞ今仕りまする狂言替名の次第

一關原の廣季	白友	右衛門	一官女	吳羽	花	丞
一藤原の禪師	吉平	次郎	一同	みどり	井	つ
一頼子鐵山	又三郎	次郎	一繼	の	母	源
一山科隼人	下平	左衛門	一大井	の前	司	平
一草履取春介	喜世	之	一ひの熊	外記	之	進
一草履取秋介	平	七	一小	姓	齋	田
一葛蒲の内侍	し	卷	一草履	取	京	之
一中辻大和之介	新	五	一小	姓	丹	彌
一同若狹之介	平	八	一栗	原	平	馬
一平の介盛	善	五	一神	崎	兵	介
一さつきの内侍	勘	太	一絶	間	兵	助
一後宇多の院	大	之	一大屋	九郎	左	衛
一隼人女房常夏	政	九	一町	人	彌	介
一頼豪法師	傳	郎	一そこ	ひろ	介	太
			一た	か	ひ	と
						親
						王
						長
						兵
						喜
						利
						半
						兵
						助
						彦
						小
						孫
						田
						平
						源
						勘
						兵
						づ
						丞

其外座中不殘罷出でまする東西々々

第一戀歌部

心の瀧
あやめぐさ
そとばは二つびき

是貴船川

爰に洛陽紫野大徳寺の住僧頼祐禪師と申すは、當今の御叔父にて、此度伽藍御建立有りて造營既に事終れば、天子行幸あるべしとて、攝政關白殿上人徳寺へ入り給ふ。頼祐立出で對面有り。時に關白申さるゝは「事改つた申し事ながら、當今は人皇九十代後宇多の院と申し奉つて御聖徳天にかなひ、殊に佛神の御崇敬世に越えさせ給ふ故、此度伽藍の御建立、斯程有難い事はござらぬ。追付臨幸有るべきなれば、非常を警め無禮のないやうに急度相守られてよからう」と一々にいひ渡し、皆々奥へ入る。

爰に北面の侍山科隼人は下人春介秋介を伴につれ、大徳寺の庭山を見物に出で「扱もく結構な事ではないか。極樂の玉の臺も是程には有るまい」と眺めぬる所へ、さも美しき上臈一人來り隼人を見て、はや色染むる紫の杜若を折持ち様々に濡れかゝる。ぬれのせりふ扱彼の上臈隙を窺ひ彼處の柳が池へ身を投げんとするを、隼人驚き押し止め「最前よりの風情、何とも合點がゆかぬ。様子をいへば殺さぬぞ」「しからは何を隠しましよ。自は當今の御側近く召使はるゝ菖蒲の内侍とは妾でござる。女官多き中にも、わけて寂慮淺からずは見えながら、つひに一夜の御添臥にも召されず、生きてかひなき此身なれば、采女が古へを慕ひ、此池へ身を投げて死ななと思ひ、是迄は参りました。其儘に殺して下され」隼人聞き「段々承り届けました。さりながらお果てなされても詮ない事。先づ暫く」と止めぬる所へ、藤原の廣季來て「様子を見た。隼人内侍兩人の不義に極まつた。行幸の先にて、不届千萬此由奏聞致す」といへば「全く不義ではござりませぬ。かやうくの次第」と様子を語れば「扱はさやうか菖蒲殿の御心底痛はしう存すれば、折を伺ひ奏聞し寂慮にかなふ様に仕らう。先づ此事は沙汰なしに」と皆傍へ入りける。

爰に又中辻大和之介同弟若狹之介は、此度御堂造營の奉行にて、此處彼處を見廻りしが、柴垣の内女に女の隠れぬるを見つけ、何者ぞと引出せば「構へて聊爾なされな。自らは、五月の内侍でござる。恥かしながら平の介盛に心をかけ、御幸のお供を幸に、此所に出逢ひます筈でござる。構へて沙汰をして下さんな」扱は左様か、あの鬚男めは、あやかり者ぢや。あれく介盛が是へ見ゆる」と三人ながら隠れてゐる所へ、平の介盛拔足にて來り、柴垣の鳴子を鳴らせば、大和之介内侍の小袖を被り立出づれば、是はと様々戯れ、小袖をとれば大和なれば、肝をつぶし、色々いひ紛らかし、

遁げんとするを引止め「最前より様子を聞いた。成程おれが中立にて、一夜ばかりは苦しい。併し最早還幸も近づけば、重ねて首尾もあらう。先づ内侍殿にはお歸りなされ」「成程心得ました。して、帝様の御殿はどれでござる」大和聞き「あれでござる」といへば、内侍氣色をかへ、御殿の内へ入らんとするを、兩人押し止め「是は一圓合點參らぬ。御簾の内へ通す事はならぬ」といへば内侍聞き「誠介盛に戀慕は偽り。え、口惜しや。嫉ましや。同じ雲居に住みながら、餘所にのみ見る月影を菖蒲の内侍に寝取られて、つらきは主上の御心。解けぬ思ひに身をこがす、恨を晴さで置くべきかと、忽ち鬼女の形となり、大和之介に飛びかゝるを、取て押へ刺通し、變化の物を組止めた。出逢へ〜」と呼ばれば、各駈出で、様子を見れば、變化は消え失せ、短冊一枚遺り有り。取上げ見れば、五月闇かきくらしぬる獨寝を早くも告げよ山時鳥「是は正しく、五月の内侍が手跡なり。察するに嫉妬の執心、主上の御殿へ通ひけるに疑なし。此由奏聞申さん」とみな〜奥へ入り給ふ。

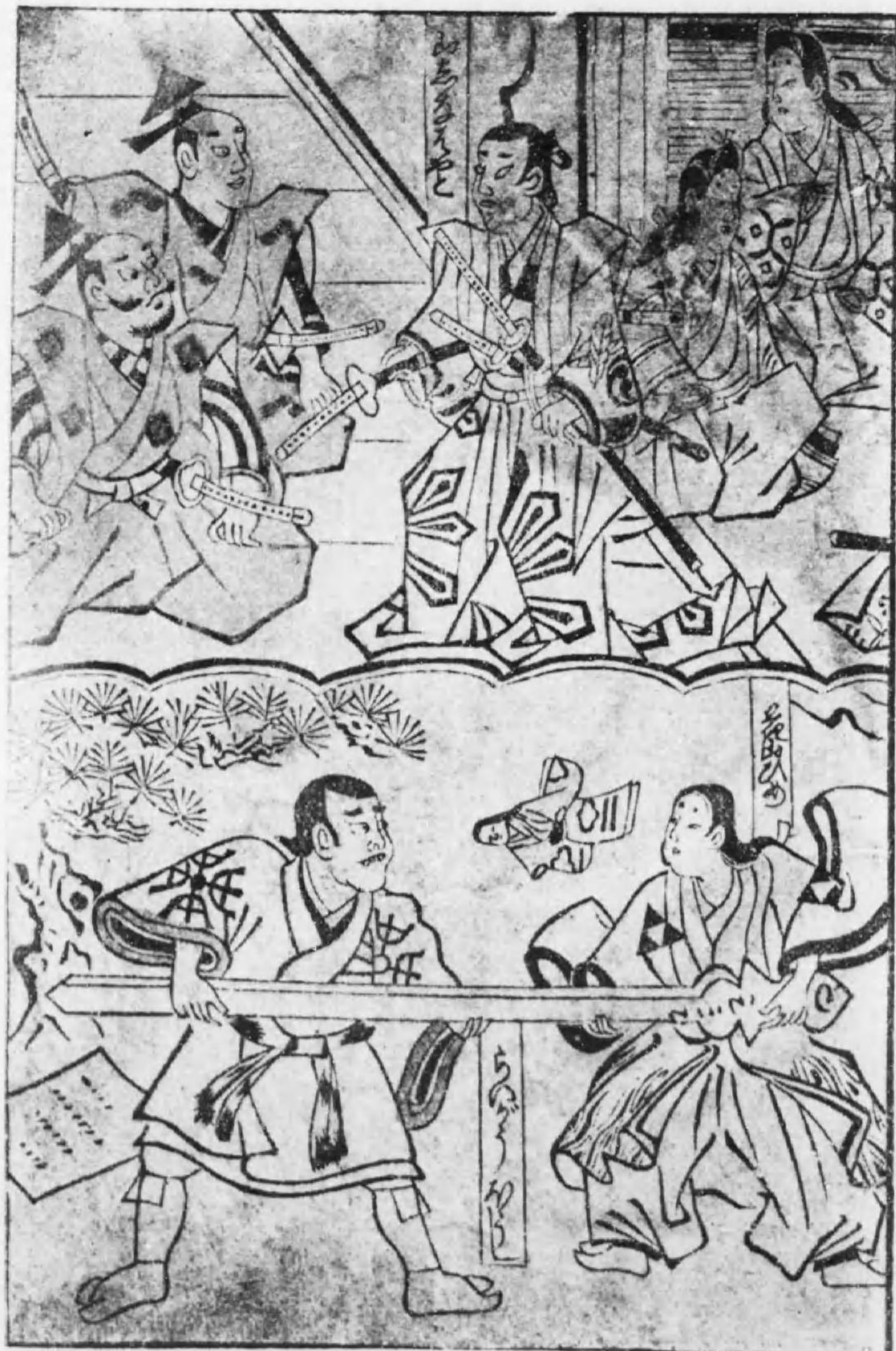
去程に天皇は假の御殿に出御有り。攝政關白列座にて、隼人竝に大和之介を召され「さても此度菖蒲五月が嫉妬につき、玉體危き所を、兩人が働き故、早速に静めたる御褒美」とて隼人には獅子

王といふ御劔を下され、罷り立つ。さて大和之介をば御簾近く召され「聞きしにまさる美男かな。名さへ和ぐ大和なれば、さぞな心も優ならん」と御心をうつされ、御歌一首下さる。思ひよる心の瀧の白糸を、いづれの世にか解けて見るべき。「此御返歌を仕れ」中辻畏つて、思ひよる心の瀧の白糸を、説かばなどは落ちざらめやは。「扱は嬉しい自らは歌の妻、そちは歌の夫。されば行末かけて變り給ふな。なに公卿達、朕が戀はかなうた」と御悦有りければ、大和之介「是は何とも心得ぬ繪言でござります。様子が承りたい」其時廣季進み出で「不審は尤。今は何をか包み申さう。先づ以て先帝崩御の刻御世嗣喬仁親王は二歳にて御幼稚なれば、是なるは親王の姉宮にて、女性ながらも位を御嗣ぎなされた。然るに其方美男ゆゑ有難い繪言なれば、夜の殿の御添臥に窺慮を慰め奉つてよからう」大和之介承り「さては左様にござりますか。さりながら某賤しき身、天子の御宮仕天の恐れ憚あり。殊に某には許嫁の妻女ござれば、幾度も御仁免を蒙りませう」と申し上ぐる所へ、頼祐禪師彼處より立出で「大和之介繪言を背くは不調法な。其上賤しき身に天子に近づく事勿體なしと申すか。愚や先例なきに非ず。所謂天皇は女ながらも位を踐み」とて賤しき民を召上げ御語らひありし例遠からず。早々勅答いたしてよからう」大和聞き

「さればその□女帝は左様なる不例にて天下は忽ち亂れたり。察するに此方は先帝の御弟當今の御叔父にて、帝位を踐むべき身なれども、惡逆不道にましますゆゑ出家の宣旨ありしを、日頃無念に思ひ、女帝の宮に好色を勧め、親王を失ひ、御身上見ぬ鷲王とならんと巧、いはすと俺が合點だ。かく申す大和めは、不義の振舞存じもよらず。まづ某は立ち歸る」と取付く者を踏倒し、あたりを拂つて歸りける。頼祐廣季腹を立て「大和之介姫宮の宣旨を叛く事、北面大井の前司が娘絶間姫とて三國一の美人あり。彼と妹背を結ぶゆるゑ、お前をば捨てました」姫宮「其絶間はそれ程に美しか」なかくの事、三十二相世に勝れ、申すに言葉も及びませぬ」「さては絶間に見かへられ、自は捨てられたか。えゝ妬まじや。われ十善の位を踐み、百官卿相に侍かれ、雲の上なき樂みも、夫婦妹背の道ならでは、玉の臺も何かせん。此上は、如何なる山林幽谷の住居となり(本ノマ、)浮世を餘所に眺むべし」と「爰を放せ廣季、お止めなざるな頼祐禪師」と亂れ心の花衣、貴船をさしてぞ出で給ふ道行淨瑠璃

爰に又頼祐禪師の一の弟子式部卿頼豪は、内々師匠に頼まれ、親王を調伏のため貴船の宮に参りしが、内々絶間姫に心をかけ、親王調伏をば脇にして、己が戀をぞ祈りける。弟子の法師嗽をせんと

禊の川に立寄れば、美しき女人形ありけるを、取上げて参らする。頼豪つくく見れば絶間姫の姿なり。大に悦び「年月の大願既に叶ひたり。察するに此人形此所に有るからは、絶間姫又は所縁の者参詣せしに疑なし、如何せん」と思案し「きつと思ひ出したり。幽霊の形になり、絶間ゆゑに死にたると誑り、心を引いてくどかんと」弟子坊主が手に足袋をはかせ、足にして、逆様なる形に成つて待ちぬたり。こゝに絶間の乳人は腰元を引具し、貴船に参り、絶間姫と大和之介の御中睦じく、追付け婚禮あるやうと、禊川に人形を立て祈誓して歸らんとする所に、彼の幽霊よろほひ出で「あゝ苦しや、堪へがたや。それなるは絶間殿か。私は式部卿頼豪でござる。其方を深く思ひそめしが、さすが出家のあから様には申されず。やる方なさに井戸へ逆様に身をなげて、死にました。修羅の苦患の苦しさを、少は推量し給へ」と、手足を顔はせかきくどけば、乳人腰元肝を消した。「私は絶間姫の乳人でござる。さては頼豪様か、お痛はしや。さほどに思召すならば、何とぞわしが取持ちませうに、お果てなされたれば是非もない事でござる」頼豪聞き「さては此世に在るならば」「此戀を取持つて」「そんならまだ死にはせぬ」と幽霊の装束をすて「誠は其方を頼まうためぢや。不便と思ひ、せめて言葉なりともかはさせてたもれ」乳人「いかに折もござるならば御執心の



通り絶間様へ申しませう。先それ迄はおさらば」と乳人は館に歸りける。道行 浄瑠璃 さればにや、姫宮大和之介に捨てられし、恨の一念やむ事なく、貴船に詣で絶間と大和が仲を裂け、我身の契未久に諸願納受垂れ給へと、一札の告文を天に捧げ祈らるゝ。頼豪此由を見て、とある松の木に登り、告文を奪ひとれば、姫宮は嬉しや我が願ひ天に通じ告文を納め取給ふよと、なほ〱祈り給ふを、頼豪はをかしがり、人形を取落せば姫宮取上げ見給へば、短冊を手持たせ、大和絶間が妹背を祈る歌の様、さては絶間が姿か、見るもなか〱腹立と、咽喉にくひつき、又は手球にとり給ふを、頼豪松より飛んで下り、何者なれば狼藉と奪ひとれば奪ひかへし、互に暫し争ひしが、姫宮怒つて、側なる卒塔婆を押し取り、打つてかゝるを頼豪開いて卒塔婆を取り、えいや〱と引合へば、卒塔婆中より二つに折れ兩方怒つて立つたりける所へ、頼祐其外公卿大臣馳來り、頼豪を縛め「姫宮に向ひ無禮をなす。殊更出家として、絶間に執心かくる事、一方ならぬ罪なれば急度縛め置くべきなり。扱又花山の姫宮は御望に任せ大原へ御供申しませう」と前後を守護し奉り、大原へ入らせ給ひける。

第貳 禁戒部

うつしゑすがた 坊主たてがみ

是 衣 手 森

北面大井の前司屋敷には、繼母ならびに甥の檜熊外記之進其外侍小姓ども召集めて「そちたちも知る通り俺がことは娘を二人持つた。姉絶間姫はまゝしき仲、八重垣は實子なれども、俺はその隔てもなく、二人ながら大切に思ふ。姉絶間には北面大和之介を聲に取り、追付け祝言もせうと思ふ所に、花山の姫宮不義の戀慕故大原の奥へ隠遁なされた。それを幸ひに叔父の頼祐禪師殿今は位を御嗣ぎなされ、大和之介は繪言を背く科として、閉門めされた故、祝言もならず、氣の毒な」といへば外記之進「なる程御意の通り、それに就き帝より私方へ勅使を下され、此家繁昌の事が出来ました。様子は内證で申さう」と打つれ奥へ入りにける。

爰に頼豪が叔父に底廣介太夫とて浪人有り。「扱々貧程つらい物はない。家賃は大分たまり、それ故借家を立てとせがむ。甥の頼豪方から折々の貢を頼みにしてゐる。此頃は便がない」といふてゐる所へ、大屋「御見廻申す」といへば、そのまゝ櫃の内へ隠れゐる。家主五人組内へはひり「今迄聲がしたか」と櫃の蓋をとれば「之はよく御出なされた」といふを引出し「此方は大分の家賃も濟まさず、借家も立たぬ故、五人組を連れて参つた。今日の内に借家を明きやれ」介大夫「御尤ちやが、大徳寺より金が来る筈でござる。まちつと待つて下され」「いかな〱、片時もならぬ。せめて所帯道具を

賣拂つて家賃の形に取らねばならぬ」と腹を立つる。「そんなら借家を立ちませうが、路錢なくては國へも行かれませぬ。御無心ながら此道具をいづれも拂物にして御買ひなされ、賣出しを路錢に下され」といへば「是は料簡せずばなるまい。成程買うてやりませう」といへば、介太夫櫃の上に上り、諸道具をせり物にして賣渡す。後にはくたびれて目をまはせば、水よ氣付よといふ所へ「大徳寺より使に参つた」といふ。介太夫悦び内へ入れ「頼豪方より何ぞ來ましたか」「いや何も参りませぬ。此方の甥頼豪殿、科の様子は存せず、師匠の氣に背き、それ故此方へ預けに参つた」と頼豪を乗物より出し引渡し「扱又此方をは念のため大家へ預けます」といふて歸る。介太夫方落し「行先へ戸を立てたやうな事ぢや。汝は何科をして預けられた」と頼豪「全く不届はござりませぬ」と貴船にての様子を首尾よく語れば「扱はそちが越度はない。やがて歸參する様に御水をあげう」と頼豪が袈裟を外し質屋へ持つて行く。

跡にて頼豪絶間姫の繪姿を壁にかけ「君故かやうに成りはつるを、あはれと思召さぬか」と泣いて笑うつ伏しにける。時に不思議や繪姿の絶間姫掛軸をはなれ現れ出で「なういとほしや頼豪様。左程に我を思すかや。さりながら、自薬師に深き願有りて、虎の繪馬を自筆に畫き、奉納せんとの誓

有り、此願充てて其後は御心に從ふべし」頼豪聞き「唐土の虎は日本の猫に似たりと承る。此處にて某猫のまなびを致すべし。それを寫してわが戀をも叶へ給へと」約束し、頭巾を被り耳を付け猫の傲びの現なき戀慕の絆朽ちたる心、手飼の虎の引綱も、長き思ひにこがれよる。袂紗にそばえ爪をとぎ、飛上り駈廻り暫し狂うてゐる所へ「介太夫立歸り、肝を潰し、是は氣が違うたさうな」と奥へ追込み「さて此事を大徳寺へ言はずばなるまい。紙衣がよごれた。洗濯して着て行かん」と裸體に成り、紙衣を洗へばきれくになるを、竿にかけ干してゐる所へ「ものもう」といふ。介太夫裸身に素袍を着て出で迎へば、拙者は「檜熊外記之進と申して絶間姫が叔父でござる。其方の甥頼豪殿絶間に御執心の由承る。それにつき談合に参つた。絶間は私姉の爲には繼子、妹八重垣は實子なれば、何とぞ世にあらせたく存する所に、此度帝より宣旨下り、絶間を後に備へよと勅使がたちました。此上は頼豪殿ひそかに絶間を盗み取つて下され。然らば絶間は不義者なれば、妹八重垣を後にそなへ、我等が望み叶ふといひ、頼豪殿の戀も叶ひます。然らば此方は知行の主にならう。先づ是は當座の印でござる」と小袖付臺山の如く並べける。介太夫悦び「成程心得ました。追付け忍び入り、絶間を盗み取りませう」萬事は首尾を頼みます。さりながら法師の體にては



絶間が部屋へ入れますまい。男の姿になり大和之介と成り、お出なされい」と大小を渡し、約束極め外記之進は歸りける。

介太夫は頼豪を呼出し「是屈竟の事なれば仕度をせよ」と、俄に頼豪が月代を絲髪に剃り立て、介太夫を供につれ、絶間が館へ急ぎける。爰に中辻大和は花山の姫の宣旨を背きし科にて、逼塞してゐたりしが、頼豪絶間に執心かけし様子を聞き、若しや其方へ靡きしかと、心をひかんと弟若狭之介諸共に、勸進比丘尼の姿になり、絶間の館へ行きければ、局腰元立出で「美しい比丘尼ぢや、名はなんといふぞ」「ゆせんと申します」局聞き「ちろりのやうな名ぢや。此頃絶間様御氣色あしければ、小歌をうたはせて慰めませう」と奥へ入り、かくといへば絶間聞き「それはよい慰みぢや」と彼の比丘尼を呼入れて見給へば大和之介なれば絶間ははつと驚き、互にそれと言はねば目付に恨を含まるゝ。八重垣は「なう比丘尼、十界の繪解が聞きたい」「心得ました」と繪圖を掛け「皆近う寄りて聞かしやんせ。總じて女は罪深いもの、殊に夫の目をくらがし、或は出家を落し不心中女は畜生道へ落ちます。正眞の地獄の□□つらばかりでござんす」と、様々當言をいへば、絶間今は耐へかね「なうわしが不義とは證據がござるか、是非に聞かねばならぬ」としがみつき、頭巾をとれば男

なれば皆々興をさましたるくぜつごと大和之介も絶間も互に恨み恨みられ、つひには心打解けて打連れ奥へ入給ふ。

さればにや頼豪は介太夫を伴につれ、變る姿も丹前の、身狭小袖の振もかへ、丹前にて絶間の館に行きければ、案内乞へば腰元出でて「誰ぞ」といふ。「誰とは愚か、二人、まづ身が中辻大和といふ花聲ぢや」といへば肝をつぶし、かくといふ。皆々立ち出で是はいか様頼豪ならんと、腰元を絶間姫に拵へ、頼豪を呼入れ、「私は絶間姫でござんす」といへば、頼豪つくづく見て「こなたが絶間殿か」というてゐる所へ絶間腰元になり茶を持つてくる所を手を捕へて「是はお情ない。此方の事を束の間も忘れませねば、見違へる事ではござらぬ。御返事を聞きませう」絶間是非なく「御心をひいて見ました。それ程に思召さは、成程今からは夫婦でござんす」と戯れゐる所へ、最前の比丘尼出づれば頼豪見て「絶間殿は比丘尼をお使ひなさるゝか」大和之介あざ笑ひ、誠は後宇多の院の上北面中辻大和之介上々の箱入絶間が夫を見て置け」と、頭巾を脱ぎ擬勢すれば「扱は顯れた、絶間を此方へ渡さぬと打果す」といふ所へ、繼母外記之進かけ來り、大和これを見て「絶間を一旦おれにくれて置いて、聲を二人取り給ふか」外記之進「成程誤つた彼奴は頼豪とて絶間に戀慕せし悪僧、早々

討つて棄てめされい」介太夫聞き「それは仕組が違うた」といふを「それ遁すな」と討つてかゝれば跡をも見ず逃げて行く。「討ちもらして残念。さて絶間ことは追付け首尾よく婚禮致さう。まづは早々立て〜」と館へ歸り給ひけり。

第三 述懐部

おぼろの清水
髪きり柳

是 小 原 月

大井の前司は眼病にて兩眼つぶれ、小姓どもに手をひかれ立出で、外記之進若狭之介其外侍召集め「此頃絶間方へ忍者有る様子を聞いた。大和之介手前の一分も立たぬ事ぢや。某直きに姫が聞に行き實否を見届け思案ある」と奥へ入る。扱絶間部屋には姉妹の姫局腰元集り、色々の物語する。絶間「おれはいつ祝言をする事ぢや。八重垣もさぞ氣のどくに思やるであらう。したが若狭之介殿のござれば餘り舌たるい物言ひ目付、姉を側に置いて、ちつと嗜めやれ」八重垣「是は迷惑でござんす。わしは否といふものを、こな様方の無理に取持ちて夫婦になされた。兎角姉様の祝言の無い内は、いつ迄も祝言しませぬ」といへば「扱は若狭之介殿のござつても目を合す事もならぬぞや」「成程あの人の顔は見たうもござんせぬ」といふ所へ、若狭之介來れば八重垣「なうござんしたか」

といふを、絶間咳拂ひして「まだ姉が祝言しませぬ」といへば、迷惑さうにうつぶく。絶間は「なう若狭殿こな様の顔を見たうないと八重垣がいひます」と色々なる事をいへば「成程私がやうな若輩者の御氣に入らぬも尤、とかく爰にゐるがわるい」と立つて行けば、八重垣走り出で「姉様に色々なぶられますにより、座敷なりにいひました。それを誠にこな様には聞えぬ」と泣けば「是は皆座興ぢや、機嫌を直しやれ」と打笑ひ若狭之介「今日は親父への御機嫌を伺はぬ。俺はきつく草臥れた。八重垣そなた御機嫌を見てきて下され」「なる程心得ました」と表の方へ行けば、若狭之介「如何に屋敷の内でも若い者を一人遣るは悪い。皆ついて行きやれ」といへば局腰元立つて行く。跡に絶間若狭残りゐて「只二人ゐるのもどうやらいな物ぢや」といへば、若狭「はて二人ゐまいものでもござらぬ。いな所へ御心がつきます」とはや濡れかゝる亂髪「いかう髪がそこねました。櫛をお貸しなされい」絶間「わしが撫で付けて進ませせう」と立寄り髪を撫でつければ「何とこな様は大和殿がいとしうござるか」絶間聞き「はて夫ぢやものを、いとしうなうてなんとしませう」「して私は可愛うござるか」「成程大和殿の弟ぢやによつてこな様とていとしうござるか」「それは眞實の無い御心、聞こえませぬ」と手を取つて引据ゆれば「はて人が見ます」「人が見ても大事ござらぬ」とい

ふを、突倒し「此方は何とやらをかしい挨拶、なに共合點ゆきませぬ」と氣色變れば、若狹之介「淋しさに皆座興にいひました」絶間聞き「わしは眞實かと思つてはつと思つたれば、痞が起りました」と枕引寄せ寝れば、若狹「慰みに本でも讀みませうか」絶間「そんなら徒然でも聞きませう」「いやいや氣色の悪いに無常な本は入らぬ物。浮世本を讀みませう」と捜し出し「是は珍らしい山村芝居の狂言本ぢや。松本兵藏濡の所がある」と様々戯れかゝれど絶間は寝入りて知りもせず。若狹之介四邊を見廻し小袖を被り添臥してゐる所へ「神崎兵介物陰より立出で「忍び者が有る、出であへく」といふ所へ、大井の前司立出で兵介が口を塞ぎ「一人も伴する事無用と申したに、汝誰が許して參つた。して忍び者は誰ぢや。若狹之介様でござります」前司肝を潰し「どれにゐるぞ」と絶間若狹を引起せば、絶間目を覺し「なうと、様御出でなされましたか」といふを突倒し「扱もく不義者め。汝が夫の弟にかゝる振舞天命冥加にも盡果て、大井の家は廢つた。人手にはかけぬ」と刀を抜く所へ、八重垣繼母外記之進局腰元走り出で、是はくと縫り付く。絶間興をさまし「と、様は氣が違ひましたか。わしもこなた様の娘ぢやもの、そもや左様な不義がなるものでござるか」と泣き沈めば、若狹之介「はて絶間殿、もはや現るゝからは、お隠しなされても詮の無い事。わしは覺悟致した」

と腹一文字に搔切り、遂に空しくなりければ、前司は「おゝ生きてはゐられまい。汝も今が最期ぞ」と、絶間を取つて引寄する所へ、大和之介駆けつけ「是はどう致した事でござる」前司泣く「様子一々語れば大和も惘れ果て「扱々天の命にも盡果てたる奴輩かな。とても助けぬ命、自害すれば幸ひや」と若狹の死骸を見れば懐に一通有り。取上げて是を讀む。書置の事「扱も此度姫宮の君大和之介殿に不義の戀慕を思召しかけられ、其戀叶はぬ故御位をすて、大原の奥に隠遁ありしを幸ひに、頼祐禪師位を乗取り、驕を極め給ふ故、民の弊人苦しむ。是偏に大和之介姫宮の御心に從ひ給はぬ故、されば某 苟くも國家の爲を存じ、大和之介殿に様々諫言申すと雖も、絶間殿にほだされ承引し給はず。そのみならず、世の中の繼子繼母の挨拶、今に始めぬ嫉み深く、折節四邊に悪人ども徘徊して、燃ゆる火に薪を添へ、絶間殿の方へ忍者あると虚言を風聞致す。某これを幸ひに忍男に罷り成り不義の名を取り相果つる。是家の爲、國の爲、天下の爲に死する身の忠勤曇らぬ心月は、屍の上に輝すべし。爰を聞分け大和殿姫宮の御慮に從ひ悪人を滅し、御代安全に治りなば、某が亡き跡に一遍の念佛をたのむのかりの假初に、申交せし八重垣姫斯隔たるも前世の事。あら名殘惜しや。南無阿彌陀佛」と書留む。大和夫婦前司八重垣諸共に、悲歎の落涙頻なり。大和涙を押へ

「若狹之介が心底兎角寝むるに言葉なし。さり乍ら姫宮の叡慮に従へば、絶間への道立たず、絶間に添へば、斯くまで若狹が忠心を無にする、進退爰に谷つた。これ出離の縁、菩提の種、今此時に悟らずば、何時を期せんこれ迄」と髪を切らんとする所を、絶間押し止め「成程聞届けました。さりながら出家をば五日延べて下され。自ら大原へ尋ね行き、姫宮の御心を引き、まこと切なる御心ならば、成程わしは思切りませう。また上の空なる戀ならば、かなはぬ迄も御意見を申して見ませう。其後は兎も角も御心に任せ給へ」といへば、前司も、「いかにも是は尤なり。然らば大和の出家をば五日の内は止むべし」と約束すれば、絶間は悦び、大原を指してぞ急ぎける。

さる程に花山の尼君は大原の奥の山上に庵を構へ、同じ様なる尼二人御側に附添ひ行ひすましおはします。所へ八重垣姫はさも風流に出立ち、腰元數多打連れて大原の奥の瀧川に布を漂してゐる所へ、絶間姫下人京介供につれ、變る姿は男色の、其色深く編笠をきて見よかしの風俗にて、八重垣姫と行違ふ。其振袖の移香も、こぼれかゝれる風情なり。八重垣絶間が刀の鞘を引き止むれば「これは何となさるゝ」「いや此鞘がわしに當りましたによつて止めました」絶間聞き「此鞘は田舎者でござれば、御堪忍なされい。宿へ歸りきつと申しつけませう。お放しなされい」「いや放す事はなりま

せぬ」と刀を奪ひ取れば「これは狼藉な。それは私が魂でござる。お返しなされい」八重垣「こな様の魂ならば、風をひかぬ様にわしが抱いて寝ませう」絶間聞き「やい京介、あの上臈にはさはり有り、あの刀はおうじ孫六といふ刀ぢや。孫六を抱いて寝給ふならば、夫のある人には由ない事をいうた。いざ歸らう」といへば、八重垣聞き「成程わしは孫六が女房でござんしたが、此頃夫婦いさかひをして、つい去られました。今は寡婦なれば、可愛がつて下さんせ」と寄添ひ、取り付き、様に濡れかゝるを、花山の尼は障子をあげ、此體を御覽じて二人の尼と囁きて、いと心はこゆるぎの、松に時雨のそめくと、辛き浮世に立歸る、餘念なく眺め入りてぞおはしける。時に絶間は「鳥が啼けば歸りませう」八重垣「わしはあの鳥ほど憎い物はござんせぬ。いかい嫌ひでござんす」絶間聞き「人ごとに嫌ひな物がござる。わしはあの蜘蛛といふ蟲がきつい嫌ひでござる」八重垣聞き「人事いへば影さすと、それ蜘蛛が出ました。それ襟へはひります」といへば「是は氣味のわるい事」と、帯を解き振ふ所を、八重垣しと抱付き「はて女郎蜘蛛でござんす」と袖より手を入れ戯るゝを、花山の尼はうかくと胸とゞろきの橋柱、くもでに物の羨しく、かけし輪袈裟のわけもなく、彼處へ投棄て、今は早や、あれへや行かん、止らん、あゝさて辛氣氣の毒と、側なる柱に抱付き、又



は附添ふ菖蒲阜月二人の尼を引寄せて、抱付き、詮方もなく姫宮は、彼處の枕を取り上げて、起臥しげき小笹原、しのに物をば思寝の、人目もわかず抱付き、正體もなき有様は、げにやめ難き惑ひなり。時に絶間は兎に角に暇申すと立歸れば、姫はいよ／＼亂れがみこの一筋のつてにさへ彼の大象も繋がるゝ。ましてやかゝる瀧川の、思ひ亂るゝ白波や、鹽焼く海士の煙だに思はぬ風に靡く習もあるものを、どうでも思ひ切られませぬ」と絶間が袖を引き止むれば、花山の尼も我知らず「人の心をくみてしる。女は同じ戀草の、引手を思ひ切らぬこそ、そこが女の意地ぢやもの、ふつつと思ひ切らしやんすな」絶間聞いて「今のは誰ぢや」八重垣聞いて「あれはこれまでござんす」「扱はごたまか、よし餘所目をば厭ふまじ。此上は兎も角も仰に任せ申さん」と又抱付き、うらわかみ寝よげに見ゆる若草を、人の結ばん契の程、姫宮餘りに氣を失ひ、人目も耻ぢず白玉か露より軽く上よりも、轉び落ちさせ給ひしは、愚なりける次第なり。八重垣絶間驚きて「此方は誰ぢや」尼君聞き「わしは此の庵の主でござる。先程から様々の戯に庵が穢れました。歸す事はなりませぬ」八重垣「扱は主様でござんすか。何も粗相な事はござんせぬ、お許しなされませい」「そんなら許してやりますほどに、あの若衆をば俺に下さんせ。貰ひました」と、絶間に取付き戯れ給へば「何が扱、御心底偽り

なくば「成程夫婦になりませう」「それは眞か」と抱付き給ふ。處を絶間脇指引抜き尼君の黒髪をふつつと切つて取り給ふ。これをば知らず尼君は刃物に驚き、庵へ入り「そちたちは何者ぢや」「愚かや、花山の尼君様、吾々は大和之介が妻絶間並に妹の八重垣でござる。あさましや、姫宮、一天萬乗の御身として、主ある夫に心をかけ、それゆるゑ國家世の亂れ、是皆お前の好色ゆるから起りました。さりながら大和之介を是非々々戀しく思召さば、國のため世のためなれば、私が戀を思ひ切り、大和をお前に進ませせうと思ひ、御心を引き見る處に先程よりの御風情ひとはな心移り氣の見るものに惚れうならば、なんば達者な尼君でもお命はござるまい。此の上はふつつと思し召し切られよ」と道理をせめて諫言す。尼君聞召し「推參なり、汝等先程そちに戯れたを、實と思ふか。閑居の庵のつれ／＼を、晴さん爲、よしなし事をいふまい物でもない。まことは大和之介より外に戀はない。其證據には尼ながら髪をば切らぬこれ見よ」と黒髪を見給へば「其髪はこゝに有り」と切つたる鬘を差上ぐれば、はつと驚き山上より飛んで下り、顔色變つて怒れる眼に涙を持ち「情なしとよ絶間、汝すぐなる心あらば素直に來り諫言せば思ひ切るまいものではない。それに何ぞや自をたばかり、殊に女は髮形といふものを切つたぞよ、絶間。千筋と撫でし花山の尼の黒髪をば、よく

は斬つたぞ絶間。此の上はふつつりと思ひ切らぬ。え、口惜しや、腹立や。盡きの思は有明の雲の絶間に落されし、恨みの瞋恚は鳴神となつて五百生々無量劫一念、懸念の嫉妬の執心、などか晴さで置くべきか」と氣色變つて髪空様に立上り、彼處に在りし石燈籠、宙に提げ飛びかゝれば、絶間姉妹肝を消し、跡をも見ずして逃げ行くを、いつ迄か餘さんやと、天地をかへして踏む足も飛ぶが如くに追つかけしは、凄じかりける次第なり。

爰に底廣介太夫は世に零落て百姓になり、牛に乗り笛吹きながら家路に歸る折節に、絶間姫逸散に驅來り、彼の牛に飛乗り行かんとするを介太夫肝を消し「これは狼藉なり、牛盗人よ」と呼ばはれば絶間ははつと心を静め「私は馬かと思ひ乘りました。何を隠しましよぞ。私は嫉妬の恨を受け命を取られます所をやうくと逃げのびました。偏に頼みます。命を助けて下され」といへば「扱は左様かそんならば、その小袖を俺に着せて置き、其方は隠れてわやれ」といふ所へ花山の尼君は岩をも碎く勢ひにて、雷の如くに驅來り、介太夫をきつと見て、絶間と思ひかい掴み、取つて投げ伏せよく見れば男なり「察するに汝奴、この小袖を着るからは、絶間が行方を知りつらん。出せ出せ」と責められて、せん方もなく、介太夫彼の牛を放しかくれば尼君怒つて牛の元首えいやつと

引抜き、身體へうつり、眼前に畜生殘鬼の形となれば、兩人は驚きて、此處や彼處と逃廻るを、追廻し追巡り、命を取らで置くべきかと、忽ち姿を引替へて、鳴神の太鼓の音山野に響きて落ちかゝるを「雲雷鼓掣電降雹澍大雨」と念彼觀音の祕文を稱へて祈りかければ雷も、是に恐れて虚空に上つて失せければ、兩人目と目を見合せて、夢の覺めたる心地して、速かにこそ歸りけれ。

第四 忠孝部

すてくさの露
せきの戸の雪
身をしる雨

是 笠 取 山

頼祐禪師はいつしか天子の位を踐み、悪行積り驕を増す。大井の前司が妻並に外記之進を召寄せ「先達て絶間姫を急ぎ后に供へよと、勅諭を下す處に、何とて今まで延引に及ぶ。仔細あらば申し開け」兩人承はり「絶間事は忍男と密通致し、何處ともなく落失せましてござる。妹八重垣を差上げたうござります」頼祐聞いて「大切なる絶間を失ひしとは何事ぞ、七日が内に尋ね出さぬものならば、急度死罪に行ふべし」と大きに怒り入りにける。

爰に大井の前司北面山科隼人夫婦は喬仁親王の御供して大和路に知邊を尋ねて落ち給ふ。いたはしや若宮、人目玉鉢たまも、踏ませ給はぬ田堵の道、げに日月もちこちの、たつき朽ちたる古